
デスティニーな兄

六

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デスティニーな兄

【Zコード】

Z7546Z

【作者名】

六

【あらすじ】

最早物語は終わり、そして皆は明日へと歩き始める。

それぞれの歩みはあるだろうけれど、それでも歩む先の道が混じつている事を信じながら。

切っ掛けとなつた人物は織斑万春。織斑三兄妹の長男。またの名をラストサムライ。

どこかへと消えてしまつた彼を知るため、彼女もまた歩み始める。

ハル学園一学年担任
在室

織斑千冬（前書き）

メリークリスマス。
これが六のクリスマスプレゼントです。

兄さんのことか。ああ、よく覚えてる。

田舎を闊(ひろ)じなくてはまつぱつと、刀を揮(う)わの姿が田に焼きつい
てこるや。

それで、お前は兄さん有何を聞きたいんだ？

ふむ、思い出、か。

しかし、あまりお前が期待できるものなんてないだらう。いや、決して兄さんと私の仲が良くなかった、といつわけではない。寧ろ私たちは昔からずつと仲がよかつたな。ただお前が望むような珍しい過去なんて私たちにはなかつた。それだけさ。それでも聞きたいか？

……よし、なれば少しだけ教えてやるわ。織斑万春とこの男の過去を。

ふん、身構えなくてもいい。それほど面白くもない話しだしな。

取り合えず、お前も知っているだろ？が私たち兄妹が両親に捨てられてからのことでも話すか。一夏は覚えていないだろ？が、両親は私たち大事にしていた。それこそ普通の家族だった。少なくとも仲は良かったと言えるだろ？特筆する事もない、ただの家族だ。

しかし、ある日忽然との人たちが私たちの前から消えてからそれも変わった。

中でも兄さんはすぐさま仕事を始めたな。あの人たちがいなくなつた次の日から、兄さんは篠ノ之柳韻さんの紹介で仕事をしていた。だからこそあの頃私たち兄妹は食い扶持を繋げる事ができたが、その時は兄さんはどのような仕事をしていたのか、あまり話してくれなかつたな……。

ただ、私たちに知つてほしくなかつたのだろう。あの人は自分が苦しい時や辛い時、それに悲しい時ほど気丈に振る舞い自分の事を隠すのが上手かつたからな。……兄さんがそういう人間だと気づいたのは、それこそずっと後の話しになるが。

話を戻すぞ。働き出した兄さんだが、あのひとはそれでも剣をやめなかつた。いや、やめられなかつたと言う方が正しいか。

兄さんはいつだって『俺にや剣しか取り得がねえんだ』と笑いながら言つていたが、あれは正鵠を得ていた。それほどまでに兄さん

は剣にのめり込んでいた。だからこそ篠ノ之流剣術を習つた果てに、兄さんは独自の研鑽を積んで自分の剣を手に入れようとしていた。

ああ、その通りだ。普通は自分の剣など持つべくもない。新たな流派を生み出すようなものだからな。

……ただ、兄さんには才能があつた。剣士としての才能が。刀に愛される才能がありすぎた。

私は兄さんの後で道場に通い始めたからわからなかつたが、道場には篠ノ之柳韻さんとともに打ち合える人は兄さんしかいなかつた。
いや、打ち合うと言うのは違うな。篠ノ之柳韻さんだけがまともに兄さんと『斬り合える』人だった。

兄さんはおかしな人でな。竹刀、だらうか、木刀だらうが一度斬られてしまえば負けという考えを持つていた。それこそ半端な形で入つたものでも負けたと勝負を降りていた。ふふ……潔いなんて立派なもんじやない。あの人は頑固で勝ちたがりなんだ。だからこそ信念を決して曲げず、最後まで己の矜持を貫き通していた。剣であるが、ISであろうが、だ。

そんなんの人だつたからだろうが、剣の腕は天井知らずだつた。すぐさま柳韻さんを越えていつたよ。もう道場では誰も兄さんの相手が出来なくなつた。私も含めてな。免許皆伝の称号を僅か十代の子供が与えられたのだ、それほどの腕だつた。だからこそ、今度は

自分で腕を磨き模索するしか道は残されていなかつた。

苦しそうだつたぞ、あれは。普段明るい兄さんがそれを隠しもせずに汗水流して顔を歪ませながら、延々と剣を振つてゐるんだ。
：正直、見てられないと思つたさ。だけどな『くはは、恥ずかしいところ見せちまつたな』と兄さんは私に気づいて言つたが、あれほど美しい時を、私は知らん。無骨で泥臭くて、慘めにも程があつたが、懸命に己へと問い合わせて一心に剣と向き合ひ兄さんは、……そ
うだな、かつこよかつた。

だからこそ、私は兄さんの助けになりたいと思つた。兄さんがいなければ私はもっと余裕のない人間になつていただろう。だが、兄さんがいたからこそ私は中学高校に通えていけたし、一夏だつてそうだ。私たちは兄さんがいなければまともな生活さえ送れなかつた可能性がある。もしかしたら離れ離れになるかもしぬなかつた。だから私は兄さんに感謝して、人としても家族としても、そして剣士としても女としても憧れていた。

うん？ 好きだつたのかだつて？

はは、……そうだ、な。私は兄さんが好きだ。……うん？ おかしな事ではないだろう。何て言つたつて家族だしな。

だけどな、お前にもわかるかもしれないが、あれほど優良物件な男なかなかないぞ。

良物件な男なかなかないぞ。

顔も整っているし、腕つ節も凄まじい。私と違つて氣さくで、更に経済力もあつた。

……それに、あの人は『世界で始めて IIS を動かした男』だ。兄さんのネームバリューはそん所そんらの男では太刀打ち出来ぬものだつたし、一夏が IIS を動かせると発覚するまで『世界で唯一 IIS を動かせる男』として業界の最前線を無敗で駆け抜けた人だぞ。あの頃、兄さん担当での追つ掛けは男女問わざ淒絶だった。そう言えば公式戦には必ず駆けつけ、移動のルートさえも押さえるような莫迦もいたな。つまりはだ、の人以上の男なんているはずないさ。

…… ブラコンではない。事実を述べただけだ。

どこまで話したかな。……ああ、兄さんの腕だつたか。お前も知つてゐる通り、あの人は剣士としての信念に基づき、清々しいまでに己の剣を手に入れた。どうやつてか、と聞くな。あまりに無粋だ。……それに、言葉にしたつて理解は出来ないだろう。ならばこそ、実際に兄さんの剣を見たほうが早い。お前も見てきたはずだ。兄さんの太刀筋を。……だからこそ、言葉は不要だ。

事実、私は兄さんの剣術をともに理解する事が出来なかつた。ああいうのは見ただけではわかるはずもないんだ。だから少なくとも、第一回 IIS 世界大会格闘部門決勝戦で兄さんと戦うまで、私は兄さんが高め続けた剣の極致を把握する事ができなかつた。

ああ、そうだ。お前の知つていい通り、兄さんはあのモンド・グロッソで一度も被弾せずに戦い、しかもIISの特性を殆ど使用せずに勝利を収め続けた。ハイパー・センサー やスラスター ぐらいか？あの時使っていたのは。

更に兄さんは決勝戦で私と戦つまで、一度も地上から足を離さず勝利してきた。……ああ、まともではない。

結果は知つてのとおり、私の負けだった。

けれどな、気持ちよく私は負けたのさ。

……負けたのに気持ちが良いなんておかしいって？ 確かに、お前にはわからんだろうな。いや、馬鹿にしたのではない。兄さんは剣士として私と戦い、私は剣士として兄さんに挑んだ。ただそれだけさ。それだけの事さ。……ただ、それが私には嬉しくてな。

研ぎ澄まれたものというのは実用性と共に芸術性さえ兼ね添えるが、兄さんのあれは違った。兄さんはあくまで剣士で、それ以外を認めはしなかったのさ。だから兄さんは自身のIIS『灰鶴』を纏いながら剣士としての自らでもつて在り続けた。

あの時受けた太刀筋は、今も覚えてる。あまりに鋭く、あまりに疾い一撃が空を切り裂きながら私の首を狙い、それを受け止めよつとすれば、いつの間にか私は斬られよつとしている。

兄さんの対戦者だつた相手の殆ど? 気づけば斬られ、いつの間にか負けていた? と口を揃えて言つてゐたが、あれはそういう次元だつた。

剣は自身の担い手である剣士を語るので。濃密な時間をかけられて練り上げた拳動、理合。ただ無作為に揮われた一筋の太刀が人生を物語る。だからこそ、私は兄さんのそれを受けられる事と、兄さんには全てを曝け出せたあの瞬間が忘れられない。無論、忘れたくもない。

少なくとも、モンド・グロッソで兄さんに負けた相手には悪いが、私は兄さんの太刀筋を理解できだし、更に一度だけだが兄さんを空へと飛ばした。あれだけでも私には誇りぞ。

だから、私はブラコンではない。……次はないぞ、わかつたな?

……結局、剣士としての兄さんに敵う者もなく、兄さんは格闘部門優勝者となり、私は総合優勝を果たしブリュンヒルデなどと呼ばれるようになつた。

ああ、あの試合だけだな、私が敗北したのは。兄さんが他の競技にも興味を持てば、どうなつていかわからぬが、兄さんは格闘部門しか出でていなかつたしな。

当然だ、私が兄さん以外に負けるはずがないだろう？

ふつ、そういうえばお前は知つてゐるか？ 兄さんが格闘部門で優勝した後、兄さんにどのよくな称号が与えられるか、少しもめてな。

結局、兄さんの試合を見た一般市民が兄さんを最後の侍と呼び始めてから、兄さんの称号はラストサムライとなつたんだ。ラストサムライ

……似合わないとと思うが。確かに、似合わないし、私も似合わないと思つた。だけど、兄さんはあれを思いのほか気に入つていてな。あの人は時代劇とか大河ドラマが好きだつたからな。なんだか可愛らしかつたよ。

……ほう、何か言いたいよくな顔をしているな。

……そうだ、世界は女尊男卑だ。兄さんの活躍はなかなか物議を醸していた。特に時の風潮に便乗した莫迦どもがな、いらぬ疑いをかけて兄さんを邪険にした時など、思い出すのも腹立たしい。今でも腸が煮えくり返る。……まあ、そいつらも時機に黙りざるを得なくなつたがな。

しかし、予想外な事に兄さんは世の男たちに受け入れられた。

恐らくだが、彼らは兄さんを世界で唯一の男性IS操縦者としてではなく、ただのもののふとして受け入れたのだろう。事実、調査によれば、兄さんが優勝した後子供の剣道部志願者が増加したという報告もある。一夏も剣道をやる奴が増えたと嬉しそうに言つてたな。

理由、はある。兄さんがISの特性を殆ど使用せず、ただ剣士としての力量のみで戦つていたからだ。

……納得のいかない顔をしているな。

確かにそれだけが理由というのは、おかしい話だがな。

だが、男性唯一のIS操縦者という立場上、兄さんは男に恨まれるはずだった。お前にはわからないだろうが、女尊男卑の煽りを受けた世の男性はISに良い感情を持つていない。

ISが配備されて職を失つたもの、女の理不尽な物言いに嵌められたもの、そしてそれを許す社会。男よりも女が優秀である、と根拠のない持論を展開して悦に浸る阿呆もいる。男が今の世を恨み、

憎むのは当然だった。そこに現われたのが兄さんだ。

……兄さんは剣士だった。あの人は剣士としてあり続け、剣士として障害を切り裂き続けた。

ISを纏いながら、己の剣士としての技量のみを駆使し、そして優勝した。

だからこそ、世の男性は兄さんを受け入れたのだと思つ。これがISという兵器を使用する男だったら、女からも男からも排斥されるのがおちだ。

そんな兄さんだから、第一回モンド・グロッソには特別招待者として呼ばれた。

ああ、お前も知つてゐるのか。あるいは当然か……まあ、いい。

そこで昨年総合優勝し今回も日本代表として参加していた私と、昨年格闘部門優勝者で他の国家代表選抜との特別マッチを組まれていた兄さんだが、一人して棄権した。

ん？ なぜ兄さんが特別マッチに参加したのか？

……そもそも兄さんはな、日本代表の座に興味を持つていなかつたんだ。競技として戦い優劣を競う事ではなく、ひたすら真剣勝負での勝ち負けに拘り続けた兄さんは、モンド・グロッソや代表と言つものにさえ見向きしなかつた。

では、何故第一回モンド・グロッソに参加したのか？

金だ。

兄さんはな、金が欲しいがためにモンド・グロッソに参加し、優勝したんだ。

軽蔑するか？ 兄さんを。

……そうか。お前も変わった奴だな。

実はな、兄さんは私たちの生活費を稼ぐためにモンド・グロッソへと向かったのだ。

その時兄さんは学校にも行かず、自らが唯一の男性操縦者であるというメリットを活かし、その情報や実験への参加で金を稼いでいた。あの莫迦に聞く限りだと、随分とあくどい稼ぎ方をしていたら

しいがな。その金で私たちの生活費をまかない、学費や必要費を払っていたのです。

ほら、かつこいいだろ兄さんは？

……こほん、話を戻すぞ。

第一回モンド・グロッソでの棄権だったか。あれはな、お前も知つてゐる通り、モンド・グロッソを観戦するためドイツに來ていた一夏が誘拐されたのを、忌々しいことに、な。だから私たちは一夏を助けるためにモンド・グロッソを棄権した。

しかし、な。……兄さんは私よりも早く感づいたらしく、早々に一夏を救いに向かった。そこで兄さんは誘拐犯と戦い、左顔面を斬られ、左目を失った。

私はショックだったよ。

兄さんは『柳生十兵衛みたいでかつこいいじゃないかい』となんでもない風に笑いながら言つてたが、兄さんに頼られていないと言う事も悲しかつたし、それ以上に兄さんを助ける事が出来なかつた自分が惨めで、悔しかつた。

しかも、兄さんはこの怪我を理由に現役を引退し、その後ドイツへの借りを返すため私の分まで伴つてドイツ軍の教導に向かい、少しも遭う事が出来なくなつた。

あれほど自ら無力さに絶望した事はなかつた。正直、兄さんがいな間、一夏がいなければ心が潰えてしまいそうだつた。……それからだ、本氣で強くなろうと思つたのは、兄さんと並んで胸を張れる様に強くなろうとしたのは、家族を守れるぐらいに強くなろうとしたのはな。……だがな、私の分までドイツへと向かつた兄さんに申し訳がなくてな、だからこそ私は兄さんのぶんまで一夏と共にいよつとして、代表を引退したんだ。

……おかしいか？　家族のために今まで積み上げてきたものを台無しにするのは。

ふふ、言ひじやないか餓鬼。

私自身、後悔はしていないし、未練もなかつた。今でもあれでよかつたと思っている。あの時の選択は間違つていなかつたとな。それに、一線を退いて見えるものもあつた。

だからEVS学園で教師と成り、家に帰れば一夏と過ごす、そんな生活に満足していた。ただな、兄さんがいないのが淋しかつたよ。

……まあ、それも兄さんがドイツでの教導が終えて、IS学園で働く事になるまでだがな。その人が教師になるなんて、想像もしていなかつたよ。

あとはお前の知る通りさ。兄さんはIS学園で私と働き、そして……。

……まあ、いいだろ。この話はここ終るとしよう。

また機会があれば、何か話してやるさ。

始まつてしまつた連続投稿。
果たしてクリスマスが終わるまでに完結するのか。六にもわかりません。

HSS学園一年一組在籍生 山田真耶（前書き）

メリー・メリークリスマス！

私が始めて万春さんと会ったのは、万春さんがIIS学園に赴任してきました時でした。

いえ、以前から万春さんは知っていましたよ。ほら、万春さんは千冬先輩と合わせなくとも有名人じゃないですか。だからよくテレビにも出ていましたし、モンド・グロッソでの試合や他の公式戦でも姿を見ていましたので、どういう外見なのが把握していました。左目の傷跡も印象的でしたし、待機状態の『灰鶴』が剣つていうのも様になつてるなあつてずっと思つていましたよ。

けど、あの時職員室で万春さんとお会いして、びっくりしました。

代表候補生どまりだった私からすれば、万春さんは雲の上の人だつたのでどうにも実際に会うまでその人がいると思つていなかつたのかもしれません。い、いえ！『世界で唯一の男性IIS操縦者』だつた万春さんを疑つっていたわけではありませんよ！

ただ、本当に万春さんがここにいるんだつていう実感がなかつたんです。それにあの『織斑兄妹』が目の前にいると思うと、その、なんというかドキドキしちゃいまして……。

……先輩はIIS学園の先輩でもあったので、大丈夫だったのです

けれど。そんな、ブリュンヒルデを慕うにしているわけではないのです！

初めて会った万春さんの印象ですか？……朗らかな人だなーと。あの、貶めてなんてません！

テレビや試合場で見る万春さんは触れれば斬れてしまいそうな、刃の切つ先みたいな人だったんです。それに第一回モンド・グロッソでの万春さんの試合を見ていると、なんだか怖そうな人だなって思いました。視線も鋭いですし、立ち振る舞いもです。だから決勝戦で先輩と万春さんが並んだとき、本当に一人とも似てるって思ったんですよ。見た目がとかじやなくて、上手くは言えないんですけど、根本的に見えないところで繋がっていると言いますか。

だけど、職員室にいる万春さんは、その、とてもんびりと言つか、マイペースな方でした。『ま、気楽に行きましょうや』ってお仕事つて雰囲気に関係なく言つてましたねえ。

正直、あの時は万春さんじゃない人が来たんじゃないかつて思つたんですけど、先輩と仲良く話しているあの人を見て、やつと田の前にいる男性と織斑万春さんが繋がつたんです。

それから万春さんはEVA学園で勤務しました。立場としては私の同輩に当たるんでしょうか。私、あのラストサムライと同じ立場にいるつて思うと、すごくがちがちになつたの覚えてますよ。……もちろん、私と万春さんの意味合いはすごい差がありますが。

教師としての万春さん、ですか？

そうですね。……何というか、いつもフランフランとしてました。いえ、そそそんな、悪口なんかじゃないですってば！

教師としてやつてきた万春さんでしたけど、あの人ガ担当しているのは実践訓練のみで、ほかの授業は担当しませんでした。……といつよりも、出来ませんでした。

「うへ、……実は万春さん高校に進学してなくて、しかも中学校も殆ど通つていなかつた状態なので基礎学力の方が……。理由はそれとなく耳にしていますし、家族を養うためと言つことも聞いていましたけれど、でもやつぱり難しいんじやないかと思いました。

いえ、だからと書いて万春さんが教師として力不足だつたわけではありません。寧ろ戦闘という場面に関しては、あれほど理に適つた戦術理論を実践形式で見せながら教えられる方は万春さんを除いて他にいませんでした。

もともと万春さんは私なんかよりも遙かに長くIISに関わった人です。それこそIIS創成期からずっと活躍し続けてきた方ですから、経験という点で万春さんの話はとても貴重なものがありましたよ。
……本当ですよ？

それに、万春さんは気難しい生徒と上手く付き合える方だったの
で、そちらのほうではよく相談に乗ってあげていたそうです。よく
万春さん『俺は無頼漢みたいなもんだしの』って言つてましたが、
そういう点の人を信頼する生徒も多かつたです。非公式ですが、
学園内でファンクラブがあつたのも事実ですし。

何故知つているかつて？　　えつと、実は私もそこに参加
していく、それで……。あの、これは先輩には内緒にしてください。
約束ですよ？

……ただ、万春さんは自分の役割をこなすだけで、それ以上の事
はしませんでした。

えつと、その。……万春さんは教師として非常に優秀だったんで
すが。……ええっと、真面目に働いてくれないというか、何と言つ
か、教師に向いていないといいますか。

いつも自分の担当はこなしていたんですが、それもたまに忘れて
しまいますし、しかも授業しても『まじいまじい』と煙草吸つて
ましたし。サボる事も多くて、それどころか職員室にいることも稀
で……。授業を担当する先輩の変わりに、よく万春さんを探しにい
きました。

だから、いつの間にか万春さんを探すのも私の仕事に入つていて

んです……「う」。

あ、でも、でも！ 万春さんよくそれで探しにいった私に色々とごちそうしてくれました。ご飯とか、ジュースとかコーヒーとか。それで『山田は楽しい奴だねえ』と言つていましたが、私としては可愛いとか、綺麗とか、その……。

ただただ大丈夫です、なんでもありません！

……万春さんがどんな授業をしていたかですか？

そりいえば、あなたは万春さんの授業を受けてないんでしたよね。

万春さんの授業は、その、なんというか、……すこかつたです。

万春さんが担当する授業は希望者のみが行える実践戦闘演習だったのですが、あまりに過酷で人気そのものはありませんでした。私も一度参加させてもらつたのですが、……ついていくのがやつとでした。いえ、そんな軍隊みたいな訓練をしてたわけじゃないんです。生身での戦闘をはじめ、組み手、武装戦闘、そしてE.S.での断続的模擬戦闘を延々と続けていくんです。……シールドバリアー機能を切斷して、ですけど。

『俺にやあ前らに教えるもんなんざ、なーんもねえんだ。だから勝手にわかれ』と万春さんは言つっていましたけど、万春さんは生徒に身体で覚えさせようとしていました。だからシールドバリアーを切つたIS訓練を行わせたり、ひたすら戦わせたりさせていました。そうですね、あれはISのために行う訓練と言つよりも、痛みを知るための訓練と言つたほうがいいでしょう。『痛くなかったら意味がねえ』……万春さんの言葉です。あの頃は千冬先輩の指導と合わせて、鬼の織斑兄弟なんて呼ばれていましたしね。

そんな授業をしているのですから、生徒さんには傷が絶えませんでした。皆さん女の子ですから傷跡なんてあつてはならない事なんんですけど、生傷はまだ良い方でした。中にはIS同士の衝突で骨折をした生徒もありますし、万春さんとの組み手で泣き出す生徒さえいました。正直、怪我人の総数はひどいものでした。

ええ、本当にすごかつたです。先ほども言いましたが、そんな事ばかりいつもするから、万春さんの授業に人気そのものはありませんでした。ですが、万春さんの授業を選択して耐え抜いた生徒さんの殆どはクラス代表になりましたね。そして卒業後には国家代表へ選ばれた生徒もいます。

はい、凰さんや織斑くんがそうですね。お一人は万春さんの授業を選択して、見事に一年次ではクラス代表戦で優勝準優勝、そして卒業して遂には国家代表になつたんです。凄いですよねーお二人とも。

そんな訳で危険な授業ではありましたが、成果が認められていたため万春さんの授業は行われていたのです。

……選択した生徒さんのが万春さんが面倒を見た子ばかりでしたので、彼女達の熱の入りよつは凄まじいものがありましたね。他の先生では難しかつた生徒さんが、万春さんの授業を受けてからまるで戦闘集団のような感じになつていきましたよ。

IIS学園が幾ら兵器を教える学校とは言え、元々は普通の家庭で育つた女の子も多かつたはずなんですけれど、プロフェッショナルって言えばいいんでしょうか？　兎に角、学生という感じじゃなかつたです。何人かの生徒は彼女達に怖がつてさえいました。傷だらけの女の子達が集団でいるんですから。

あ、そういえば万春さん、剣術部の顧問でもありましたね。今は違う職員が担当していますけれど、発足後は部を立ち上げた万春さんが担当していました。

やつていた事は万春さんがやつていた授業の延長みたいなものだつたんですけれど、その……えぐかったです。

授業のほうはまだ授業としての形式があつて、しかも先輩の監視もありましたから大丈夫だつたんですけど、剣術部のほうはそれもあまりなくて、万春さんが思つよつにやつてたんです。

気分で変える時もあつたらしいんですけど、一対多での模擬戦や、無手対武装、超遠距離対近距離みたいな事を私が知る限りではやっていました。他にもどうやらとんでもない事をやつていたらしいん

ですけど、それを生徒さんに聞くと「地獄つて普通にあるんですね」と笑いながら言つていきましたね。……一体どんな事させていたんでしょ、万春さん？

……本当に厳しかったですよ。私も今までのままじゃダメだと思つて、一度やらせてもらつたんですけど、……うう、今でもトラウマですよ。『はは、山田一回死んだの』って顔に当たる寸前で振りぬかれた剣は。

ただ、殆ど辞める生徒はいなかつたと聞きます。辞めるにしても己む無い事情によるもので、皆必死になつて訓練していましたよ。

ふふ、不思議そうな顔をしますね。

私も最初は不思議だつたんですよ。どうしてこんなに辛いのに万春さんについていくのかつて。

でも、彼女達を見てたらなんとなくわかつた事があります。

万春さんはそんな気もなかつたんでしょうけど、彼女達にとつて万春さんの傍はひとつ居場所だったのです。訓練とかは確かに辛くて厳しいものだつたんでしょうけど、皆表情が輝いてました。

彼女達の大半はEIS学園で成績も悪く、それに素行も良くない子達ばかりでした。悪い子じやなかつたんですけれど、なんというか、

個性が強い子ばかりで。それでクラスでも孤立してたり、やる気をなくして授業にさえ出る事を止めた生徒さえいたんです。IIS学園は厳しい学校ですから成績次第では退学ということさえありますから、残念ながら彼女達の退学は時間の問題とさえ思われていました。だけど、彼女達は万春さんと出会つてから大きく変わっていきましたね。

何せラストサムライが教えるのです。世界中でもこんな事滅多にありませんよ？ 万春さんの手解きを受けられて、辛い分だけ腕を上げる事が出来るのですから、強くなつていく実感が持てたのでしよう。

それに万春さんの人柄もあつたんでしょうね。あの人は厳しいのに、本当に辛くてどうしようもない人がいると放つて置けない人ですか。あは、『そんな柄じゃねえさね』ってもしかしたら言うかもしれませんね、万春さんなら……。

え？ 良い表情をしてた？

えーっと、ありがとついざります？

まあ、そんな訳で万春さんと波長の合つた一部の生徒さんには極端に好かれていましたね。

その中には織斑くんや凰さんもいましたよ。

今では万春さん、千冬先輩、そして織斑くんを含わせて？・織斑三兄妹？とEIS業界では呼ばれるようになりましたけど、万春さんはかなり厳しくされてましたね。授業や部活以外ではそうでもなかつたんですけど、こと戦闘においては他の生徒と同じように扱われてました。……皆それが嬉しかったようです。万春さんは頑固をしないんだって。

まあ、織斑くんが第一の男性適合者であるとわかつてから『さすが俺の弟だわの』って言つてましたから、弟さんが可愛くてしかたなかつたんでしょ？

だから万春さんの弟子を名乗つっていたラウラさんが転入した時は万春さんの教え子たち、荒れに荒れてしまったねえ。

あは、はは……あまり思い出しあはないんですけど、聞きたいですか？

……生徒さんからの要望ですから、仕方ありませんね。
はあ。

詳しく述べる場に居合わせたわけではないので私も知らないんですけど、その時使用していた剣道場がめちゃくちゃになつて、怪我

人まで出たりしこですよ。それでもラウラさんに食つて掛かるんで
すからね、すごいですね。

なんか生徒さん歯怒つていたようで、しかも万春さんも『やるな
らとことんやつちまいま』とか言つて止めよつともしなかつたので、
余計に收拾がつかなくなつたそうです。結局先輩が止めきて事なき
を得たそんなんですけれど、……ラウラさん、先輩にも斬りかかっ
たそうですよ。『師匠の栄光を汚した』と言つてたと報告もありま
すが。

……もしJの話を詳しく聞きたければ、ラウラさんに聞いたほう
がいいですよ。やっぱ、私の口から言つてもビックリおかしくなつ
ちゃいますからね。

あ、そろそろの授業の準備をしなくちゃいけませんね。

ふふ、次に万春さんが帰つてきたとき、私がしつかりしている姿
を見せてびっくりさせようと思つてるんです！

それじゃ、行きますね？

……最後に、私が万春さんを好きだったかですか？

そうですね

。

それは、秘密です。

大人の女性は簡単に秘密を話さないものだつて万春さんが言ってましたしね！

オルコット家当主 セシリア・オルコット

決して。決して油断してたわけではありませんのよ。あの時私は万全の準備をして、自らの全てをぶつける覚悟を携えて万春先生の姿を捉えていましたわ。

万春先生のIS『灰鶴』は第一世代である『打鉄』をあの天災篠ノ之束が手を加え、そして独自に進化したものであり、全身装甲型の稀有なISでした。私も代表候補生として祖国で幾度も彼の姿を拝見していましたわ。

特にモンド・グロッソでのブリュンヒルデとラストサムライの試合は何度となく繰り返して見ていました。剣のみでもって斬り合つ織斑兄妹、そして片方は碌にISの機能を使用しない男性操縦者。だから灰鶴の姿は知っていましたけれど、目の前で見たのはあれが初めてです。

ええ、そうですわね。実際に見て最初は驚きましたわ。

全身装甲でありますながら現ISで最小、そして最軽量であるあのISに。

訂正しておきますが、そのようなISが開発されようとした傾向は過去にもありましたわ。ですが、あまりに脆く全力稼動を行えば

忽ち自壊してしまつISなど使用できるはずもなく、その計画すら凍結されてしまいました。しかし、ただ唯一『灰鶴』だけは別ですわ。

肩部バインダーを失い、ISの特徴である腕部脚部の装甲は既存ISと比べあまりに小さく、万春さんの身体にフィットした装甲が特徴のIS。それでいてISがISとして機能できる最低限のシリドバリアーで起動し、生体機能補助も停止させて、あまつさえ地上に降り立っているのですから。

だからこそ、欧洲で『灰鶴』は『フラジール』の名で知られていきました。一回でも被弾してしまえば全てのエネルギーが失われてしまうのです。……正氣の沙汰ではありませんわ。

しかし、あの時は舐められている、と思いましたわ。『真剣で挑んでこい』と万春先生は仰っていましたが、幾らモンド・グロッソで優勝したとは言え、こんな男にイギリス代表は負けたのかと、憤りさえ感じてしまいました。

……後で思えば、なんて軽薄な事だと後悔しました。ですが、その時はそつやつてラストサムライを侮っていたのです。

うふふ、おかしいでしょう。あの織斑万春を目の前にして私は末だあの時ラストサムライを見くびっていたのです。織斑万春もまた私が知る下賤な男の一人でしかないのだと、思い込んでいたのです。

チエルシー、お茶のおかわりを。

……美味しいですか。そう、よかつた。それは先日、日本から取り寄せた煎茶です。紅茶は無論素晴らしいのですが、たまにはこうこうのも悪くないかと思いまして。それにあなたが来ると知れば、あの頃のこと思い懐かしむのも良いものです。

……ええ、本当に懐かしい。

もうすこしひと昔の事のように思えますが、実のところそんなに時間は経つてないんですね。なんだかおばあちゃんになつたような気分ですわ。ふふ……。

それほど、日本にいた頃が濃いものだつたのでしょうか。

初めて日本に降り立つた頃などなんて低劣な国なのかと思つておりましたけれど。……ええ、その時は本当にそう思つておりましたわ。根拠なんてないというのに。ですけど代表候補生であるエリートとしての誇りと、オルコット家への矜持があの時の全てでしたので、自然とそう考えていました。

今思えば、そつして誇る事でしか、自分を保てなかつた

のかもしません。

母や父を失つて、我がオルコット家を狙う輩から我が家を守るために頑張つて、努力して、それでどうにか一人が残していつたオルコット家を死守することは出来ました。けれど、余裕なんてものはありませんでしたわ。

……だつて、そのような事をしても、もう誰も私を褒めてはくれないのですから。

私の周りにいたのは下賤な男共や、資産簒奪を目論む野蛮な者ばかりで、誰も私が頑張った事を誇りに思うような方は残つておりますでした。本当にいてほしかった人はいなくなつてしましましたし。

だから、あなたがいてくれて本当によかった。ありがとうございます、チエルシー。

……ふふ、そう言つてくれると嬉しいですわ。

そうですわね、話を戻します。

例え余裕がなくても、せめて優雅にありつとして私は胸を張り続

けていましたけれど、それが劇的に変わったのは私のIS適正がAだと判明した後です。

そうですね、純粹に嬉しかつたですわ。これでオルコットを狙う者の鼻をあかせると。実力でオルコットを守れると、本気で信じておりました。だからこそ私は死に物狂いで訓練し、代表候補生の座を手に入れました。

そのような状態だったからこそ、私は自然と女尊男卑の潮流を受けいれていいたのかかもしれません。

……いえ、これは言い訳ですね。

私が男性に抱いていた想いなど、ただの私怨でしかありませんでしたのに。まあ、それも一夏さんと戦った後になんだか莫迦らしくなつてしましましたけれど。

ああ、そういうば万春先生と戦うに至った経緯を未だ話していませんでしたわ。私とした事が、自分の話ばかりしてしまいましたわ。いけませんわね。

そもそも、あの時は授業の一環で万春先生のデモンストレーションを兼ねていましたの。

やはり万春先生ほどの有名人はブリュンヒルデを除いていませんでしたから。それに、お一方がモンド・グロッソで見せた決勝戦での立ち振る舞いを忘れられない方々も生徒の中にはいましたので、IS学園に入学できた一つの恩恵として万春先生の戦いを見ることが恒例になっていたそうですね。その時も万春先生の相手は通例どおり織斑先生か、もしくは山田先生を予定していたのです。

ですが、万春先生と戦うのは私になりました。……ええそうですわ、立候補したのです。

お一方には随分と渋い顔をされましたか、それでも譲るつもりはありませんでしたわ。

だつて折角ラストサムライと戦える機会があるというのに、それを手に入れないなどあつてはなりません。そうでしょう？

織斑先生には『代表候補生程度が何を抜かす』と脅されましたけれど、結局『たまにはそういうのも良か良か』と万春先生が仰つて下さったので、あの一時が許されたのです。一夏さんも戦いたかったらしいですけれど、『練習相手じゃ意味ねえんだ』とお止めになつたらしいですわ。

だと言つのに、私は万春先生を見くびっていたのですから、お話にもなりませんわ。所詮は過ぎた伝説だと、心のどこかで

思い込んでいたのかもしれません。

万春先生、普段は『腹が減った腹が減った』といつもお腹を空かせて、織斑先生のお弁当を楽しそうに『んまい、んまい』と言つたり、やる気のない姿ばかり見せていましたし、スーツもだらしなく着て、それで煙草をいつも咥えていたのですから。そんな姿を見ていたら、その人が強いだなんて思うこともありますわ。

……まあ、それも私が未熟だった。それだけの事だったのです。

試合が始まつた直後私は『ブルー・ティアーズ』を飛ばし、包囲網を作り上げました。その時地上で佇んでいる万春先生は結局包囲網が展開し終えるまで動きさえいたしませんでしたわ。

そう、あれは私に主導権を握らせるのではなく、あくまで万春先生がやらせてあげた形に見えましたけれど、実のところあなた方はあれがひとつスタイルでした。何故なら万春先生に射撃はあまり関係なかったのですから。もしかしたら、障害にさえなつていなかつたのかもしれません。

……私は自分の力に自信を持つていました。未だブルー・ティアーズの運用に不安はありましたがそれでも遠距離からの銃撃を行えば問題はないだろうと。先日一夏さんの決闘を経た私にはどうやってこの距離を保ち、一方的に勝利を収めるかばかり考えておりました。

私はハイパーセンサーを使用して状況を確かめました。気候、機体状況、相手の武装、併まい、こちらの武装数。

……いけると、思いました。

でも予想を超えていましたわ。

最初は何が起こったかわかりませんでした。死角をつく形で強襲したブルー・ティアーズ一機のレーザーが切り裂かれたのです。

レーザー兵器は実弾よりも早い銃撃を可能としております。収束した光速の弾丸と言えばわかりますわよね？ その威力、その熱量、その速度は段違いですわ。それが撃たれた瞬間に散つてしまつたのです。

そして再びそのような事が起こり、私はようやく理解したのですわ。

事はシンプルでしたわ。万春先生は自らに向かつて撃たれたレーザーの狙撃を近接ブレード『絶景』で切り裂いただけですの。

ただその速度があまりに速過ぎて、私には万春先生が切り終えた後の姿しか見えなかつたのです。ただ、ハイパーセンサーを用いてどうにか確認することができました。

……ふふ、そうですね。とても理不尽ですね。

しかも『絶景』は一夏さんが持つ白式の『零落白夜』のような能力の产物ではありませんわ。『灰鶴』の単一仕様能力には純粹な攻撃力さえもつておりません。

万春さんはただ圧倒的速度で『絶景』を振り抜き、ブルー・ティアーズのレーザーを切り伏せてみせたのです。

ありえませんでしょ？　けれど、そんな理不尽が私の目の前に事実として現れたのです。

確かに万春先生が優勝した Mond·Grotz では銃器の使用はありませんでしたわ。でも、それは万春先生が格闘部門に参加したからです。近接戦闘という限定されたルールでの戦いだからこそ、万春先生は勝つ事が出来たのだと、私は思い違いをしておりました。

だって、私は見落としていたんですもの。

万春さんが公式戦で見せた戦いといつもの。あのの方は相手がどれだけ距離を取り、一方的な弾雨を浴びても、ただ己の剣で全てを切り開いたのです。

しかも、私は未だブルー・ティアーズの単体操作しか行えない未熟者。歯が立たないのは当然の事。

……あの絶望感は途方もないものでしたわ。私が今まで培ったものが何一つとして通用しない、何をしても無駄と言つあの無力感を。

それでも私は諦めきれずに銃撃を放ち続けました。ブルー・ティアーズの包囲網と共に、完璧に近いタイミングでミサイルを放ちもしました。それを万春先生は切り裂き、見切り、僅かな身動きで避けていくのです。一度も空を飛ばず、地面に足をつけたまま。

だからでしょうね。もう何も出来なくなつた私は、狙撃者としての冥利をボロボロにされて焦り、状況打破のためにインターセプトを握り締めて万春先生へと向かつていつたのです。狙撃者が自ら近距離戦を挑んだのですよ？ 結果は見え見えでした。

『氣づけば、私は負けていましたわ。

ええ、近づいた瞬間に私は『絶景』で切り捨てられ、絶対防御を

発動させていましたの。

斬られた瞬間の事はよく覚えていません。それを認識する間すら『えられず、私のブルー・ティアーズは敗れたのです。

……あの戦闘は未だ忘れられません。あれから私は何度も戦い、あるいは死闘へと巻き込まれましたが、あそこまで手筈も封じられ、一矢報いる事無く敗北したあの時を。まるで、魔法にかけられたようでしたわ。

実は一ヶ月前、私は第一回モンド・グロッソで万春先生に敗れた当時のイギリス代表と話す機会がありました。

彼女は万春先生との戦いを『蟻地獄か、攻城戦のようだった』と仰っていましたわ。後で確認してみると、確かにその通りでした。彼女もまた万春先生に一撃も『えられず、またその『灰鶴』に触れる事すら許されず撃墜されたのです。

だからこそ第一回モンド・グロッソで国家代表選抜との特別試合を万春先生が棄権したと知り、涙を流すほど怒り狂ったと聞いています。彼女は万春先生と戦うため、国家代表の座であり続けたというのに、その相手が自ら棄権し、どこかに消え去つてしまっていたのですから。

彼女がどのような気持ちを抱いたかまでは察する事ができませんわ。屈辱、怒り、諦観。そして安堵。様々なものが溢れて止まらないといったと言っていますが、……事はそんなに単純なものではなかつたのかもしません。

当時、世界唯一の男性IIS操縦者であつたあのお方は人々の瞳に己の勇ましき姿を焼き付けていきました。ただ強い。己の剣士としての技量と、その矜持のみで戦い続け、優勝を果たしたあのお方を忘れる事など出来ませんわ。『俺にや剣しか取り得がねえしの』と言つていましたが説明など不要なぐらいに強くあり続け、そしてそんなん万春先生に入々は引き込まれていったのです。彼女もまた、あの人には心奪われた一人です。

あの、ファンタム・タスク亡國機業のHージェントと、同じように。

私ですか？

……うふふ、私はそうではありませんわ。

確かに万春先生を教師として仰ぎ、慕つてはおりましたけれどこの心までは奪われませんでしたの。

だって、その時はすでに私の心は一夏さんに奪われていたのですから。

……でも、もしかしたら順番が逆で、私が一夏さんよりも先に万春先生と戦つていればわからなったかもしませんわ。それほどまでに万春先生は魅力的な男性でしたから。

大丈夫です。あなたが心配するようなことはありませんわ。

はあ。全く一夏さんや織斑先生といい、皆さんブラコンなんですから。

……もうあれから四年以上経ちますのね。

私はあの敗北が忘れられないからこそ今も代表候補生の座に甘んじております。

すでに一夏さんや鈴さんには先んじられましたが、国家代表の座を諦めたわけではありませんのよ。

私もすぐにあの場所に追いついて見せましょ。織斑先生や、万春先生の薰陶を受けた身として恥じないよ。

オルコットの名と、そして私自身の誇りにかけて。

オルコット家当主 セシリア・オルコット（後書き）

今更ながらに予約投稿の便利さを思い知るなあ。

中国代表　鳳鈴音（前書き）

メリクリ！

中国代表　鳳鈴音

まあ、色々な人からあの人人の話を聞いてきたんでショウけど、私が
から言わせて貰えれば万春さんは泣き虫よ。それもしおしうう泣いてたわね。

……いやいや、怒らせるつもりなんてないわよ。ただ私が思つて
ことじを言つただけで。

それに、あんたは万春さんが泣いてるところなんて見たことないで
しょ。そりやそうよ、だつてあの人あんた達の前では強がつてばか
りいたんだから。

え、なんですかって？

そりやあんた達が万春さんの家族で、兄妹だからよ。しかも万春
さん兄妹で一番上の兄貴だから、弱いところなんて見せたくなかつ
たんじやない？ 立場にしても、大黒柱つて感じだつたし。本当の
ところはどうだかなんて、わからないけどね。

「しても、あんたよくそんな事聞くためにわざわざ」
(中国)まで来たわね。電話でもする話ぢゃない。……はあ、なん
だかその自由さが羨ましいわ。国家代表になつてから色々と面倒な
ものが増えたから、本当にそう思うわよ。

ま、そんな事私には関係ないけどね。私は私で勝手にやらせても
らってるわ。

それで、なんで私が万春さんが泣き虫だつて思つてるのかつて言
えば、私があの人と始めて会つたとき、万春さん泣いてたのよ。

ああ、どうしてそんな事になつたかまでは聞かないでよ。私もち
ゃんとは知らないんだから。

小学五年の時だつたかしら。一夏と仲良くなつてちょっと経つた
頃の事だと思うけれど、あいつん家に遊びに行つたのよ、私一人で。

そしたら一夏の奴がいなくて、しかも雨まで振り出すじやない。
通り雨つてやつだつたんだけど、どうしようかと思つてたら鍵が開
いてたのよ。その時私がこのままじゃ嫌だと思つたんだが知らない
けれど、鍵が開いてるならつて家に入つちやつたのよね。

……不法侵入つて言わないでくれる？ 私だつていけない事して
るかもしぬないってその時にはわかつてたんだから。

そしたら家中で万春さんが寝てたのよ。

その時は万春さんが有名人だつて知らなかつたわ。モンド・グロッソが終わった後の事だけど、万春さんの顔とか私興味なかつたし。『世界唯一の男性IIS操縦者』だとか、そういう人がいるつてのは知つてたけど、所詮画面の向こうじゃない。遠い世界にいる人に熱中するほどIISのファンでもなかつたしね。まあ、弾みみたいにのめりこむ場合もあるけど。

……ああ、弾？　あんた知らないの、蘭の兄貴よ。

ふーん、あいつ教えてないんだ。……相変わらずね、あの二人も。

話戻すわよ。それで一夏にお兄さんやお姉さんがいるつて話はきいてたから、この人がその万春さんだつて気づいたの。万春さん帰国したばかりで、妙に疲れてたらしくてね、私が入つても全然起きないのよ。ありえないでしょ。『立てばもののふ、座れば剣士、歩く姿は武士の華』なんて海外では呼ばれてたあの人ですよ。いつくら寝起きを襲つても返り討ちにした万春さんがよ。モンド・グロッソでよっぽど疲れてたんでしょうね。……まあ、その時にはそんな事も知らなかつたんだけど。

そしたら何か気になつてね、万春さんの事が。じつと座つて見ていたのよ。ああ、別にその時にかつこいいとか思つてなかつたわ。もちろんあの人はかつこいいけれど、でも小学五年生にそんな感性求めないでよ。ほら、子供ながらの直感つて言えばいいのかしら。なんだかこの人は違つぞ、つてね思つたんでしようね。

でね、しばらくしたらさ、あの人が泣き出したのよ。

寝ながらね、涙流したのよ。

そうね、何だかショックだったわ。

私あの頃、男の人気が泣いてる姿をよく見てたわ。ISが登場して、男の人の立場がどんどん悪くなつていって、それでね。だから言つちやえれば男の人の涙なんて見慣れてたような気がするわ。

……でも、あれは別だったわ。何が何だかわからないけれど、ただその人が悲しい事でもあつて泣いてるんじゃないかつて思つて、もしかしたら悪い夢でも見てるんじゃないのかなつてね。でも寝てるからどうしようもないし、それにはじめて会つた知らない人だから起こすなんて出来ないわ。

それで私ね、気づけば万春さんが泣き止むまでずっと涙をふいてた。

正直止める事は無理だし、それでも何かしたかったからかな。

それが万春さんとの出会いよ。

それから一夏が帰つてくるまで、一緒にいたんだけど、万春さん自分が泣いてた事に気づいてね。それでそれを知った私に驚いてたのよ。『まさか、誰かに見られるなんてなあ』なんて言いながらさ。

たぶんそれで籠が外れたんでしょうね。万春さん私の前だと泣けるようになつたらしいわ。……おかしいでしょ、十歳年下の女の子の前でしか泣けない男なんて。

だから、あの人は泣き虫なの。もうそれで私の中ではそういうイメージで固定しちゃってるわ。変えようもない。

嫌じゃなかつたのか、つて？

さあ、どうとも言えないわね。面倒だつて思つてもいたし、男が泣くなんてかつて悪いつて思つていたかもしれないわ。でもさ、それで私、一回だけ千冬さんに頭下げられた事があるのよ。『すまない。私だけでは駄目なんだ。私だけでは兄さんを助けられない』つて真剣な顔で言われてさ。……そんな事で頼られるなんて始めてだつたから、嫌だなんて言えないじやない。

それに私は私で悪い気はしてなかつたのよ。今だつてあの人比べればずっと子供だけど、それでも自分が誰かの役に立つて、しか

も必要とされてるってわかったからさ。それをうんと考えて噛み砕いて、理解して、その役目を受け入れたってわけよ。

だから、あの人の泣き顔はわたしだけのものよ。

……ずるい、ですって？ 残念ね、これはあんただってラウラにだって千冬さんにもそう、誰にも譲るつもりはないわ。万春さんの涙や弱い所、全部わたしのものなの。もうこれは決まった事よ、仕方のない事なんだから。

ああ、『じめん』じめん。元やけるのは止めるわよ。

でも、そうね。 あれが私の初恋よ。

そして、まだそれは続いている。

これから先、違う人を好きになるなんて考えられないくらい、私は万春さんが好き。

何よ、その顔。そりゃ本人が目の前にいないから、これべらいは言えるわよ。……まだ直接こんな事言える自信ないけれど。

だからさ、両親が離婚して中国に帰らなくちゃならなかつた時、どうしても中国に行きたくなくて家出までしたわ。

ずっと会えなくなるなんて、その時の私には想像できなかつたけれど、でも折角出来た友達や万春さんの傍にいられなくなつて、もしかしたら一度と一緒にいる事が出来なくなるんじやないかつてわかつちやつたからさ。

……それで、家出。いやあ、私も若かつたわねー。

走るだけ走つて、それで嫌なことから逃げるだけ逃げて。

私気づいたら知らないところにいてさ。見たことない景色に、見覚えのない地形。それに周りには知らない人ばかり。ほんと、どうしようかと思つたわよ。最悪、このまま死んじゃうんじゃないかつて本氣で怖くなつて、その内不安で涙が出てきちゃつた。

そしたら万春さんが私を見つけてくれたのよ。『おお、なにしてんだ鈴音』って言いながらさ。うちの親が連絡とつたらしいんだけど、それで万春さんが探しに来てくれたつてわけ。

ありえない話でしょ。の人良い意味でも悪い意味でも身内にしか興味ないし、それも剣とどつちか大事かつてなつたら両方取るぐらいためにしてるからさ、その時なんて一夏や千冬さん以外に関

心持つてる人なんていなかつたんじゃないかしら。私だつて一夏の友達で自分が楽になるために利用してるって考えてたと思つわよ。

でも、実際に万春さんが私を探してくれたのよ。『帰る場所があんなら帰つたほうがええ。それでも帰りたくないなら俺んとこに来て』って泣いてる私を慰めてくれてね、そのまま背中におんぶしてもらつて一緒に帰つたわ。

それがたぶん切つ掛けなんだらうけど、好きになつちゃつたのよねえ。ううん、好きだつたんだけど自覚がなかつたのよ。ただ、それに気づいただけ。

……おかしな事じやないでしょ。女の子つて大人っぽい男に憧れるもんなのよ、少なくとも私はそうだつたわ。万春さんがラストサムライつてわかつてからそれも凄かつたわよ。なんかもう、近所に住んでる友達のお兄さんから一気にランクが上がつて憧れの人つて感じで、ずっとついて回つてたような気がする。たぶん一夏と同じぐらい一緒にいたわね、あれは。

だけどね、向ひからずれば十歳年下のがきんちよだつたから、全然まともに相手してくれなくてさ。『鈴音は愛い愛い』つてさ。それが無性に腹立つたのよ。いくら一夏の友達だからつて、それ以上として見てくれないのはビリこう事だこんなにやうー！ つて。

それでまあ、結局中国に帰つてからエスに乗つて、いつの間にか

代表候補生になつてたわけ。理由は才能があつたからつてのもあるけど、万春さんに認められるにはISしかないんじやないかつて、本気で思つたからよ。……一夏もきっと同じ気持ちだつた。あいつのほつが根は深いかもしれないけどね。

でも、日本に戻つて折角それを見せようとして、自分がどれだけ間違つてるかつて思い知つた事があるわ。

一年の時か、クラス対抗戦の時に一夏と戦つてたら無人機ISに襲われてね。そう、無人機。まだ実用段階でさえないものが実際に私たちを襲つてきてんだから、たまつたもんじやなかつたわよ。

それで、私は一夏と協力してどうにかそいつを倒したんだけど、そしたら壊したはずのそいつがまだ動けてて私たちにレーザー売つてきたのよ。私その時には完全に気が抜けちやつてさ、避けられるはずもなかつた。そのレーザー、アリーナの防御壁ぐらいなら簡単に壊せるものだつたら、『あ、死んだ』つて思つたわ。一夏がカバーに来てくれてたけど、それも間にあう感じじゃない。

それで死ぬんだ、もう万春さんに会うことも出来ないんだつて、何かその時色々と考えたわ。

……だけど、それを万春さんは切り裂いてくれた。直撃すればISぐらいい完全破壊できるビームを。しかも万春さんの『灰鶴』は一発でもダメージが入れば終わる代物なのよ。

どうなかしらね。自分から死ににいく人の気持ちなんてわから
ないし、そんな危ない場所に自分から飛び込んでいくような真似、
中々出来ないわよ。

私？ 私は……って、あんた。

……そんなわかりきつてる事を私に言わせるつもり？

まあ、いいわ。だからそれで私はますます万春さんが好きになつ
たけど、でも悔しくてさ。結局自分は何も変わらない、ただの子供
のままなんだな、てさ。全然万春さんに追いついてない。それどころか、目の前で見せられて初めて万春さんの核違いな強さを理解し
ちゃつたから。それで落ち込みもしたし、泣きそうになつたりもし
たわ。それまで持つてた意地とか全部忘れてね。

でも、あの人卑怯なのよ。そういうときに限つて、私を探してくれ
れる。

だけど、私つてば落ち込んで卑屈になつててね、素直に万春さ
んの事見れなかつたの。

そしたら、あの人なんて言つたと思つ?

『何も言つ事なんてないけど、お前が無事でよかつたわ』って笑いながら言つてくれたのよ。

……ええ、墮ちましたよ。墮落必至だつたわよ！

それで、万春さんの言葉でわかつたものもあるの。今はまだしょうがない。でもこの人に笑つて欲しいから、今度は私がこの人を守れるくらいに強くなつてやるうつてね。

笑いたければ笑えばいいわ。あの織斑万春を守るつて言つてるんだからね。私も頭おかしいんじやないかつて偶に思つわ。でもそれを私は正しいと信じてるし、これは私の道だからね。……間違つてたつて後悔なんてないわ。

だから、万春さんの授業も剣術部も耐えてきた。まあ、生身で工Sと戦えとか言われたときはこの人、人間じやないわつて怖くなつたけど。

だけどね、全部を凌いで飲み込んでいつたら実際に強くなつていつたし、万春さんと過ごす時間も多くなつたから良かつたわよ。それに、たまに万春さん私の頼みも聞いてくれるから、昔みたいにぶんぶんしてくれたしね。

……ラウラがだつこされるのは、なんか気に入らなかつたけど。

万春さんはまだ私を認めてくれない。少なくとも、こんぐらこじゅまだまだだつてあの人人に言われなくたつてわかるわよ。

だから今度のモンド・グロッソ。私は絶対に負けるわけにはいかないの。一夏なんかで躓いてられないわ。私は全部を追い抜いて、万春さんの隣に立つ。そのためなら千冬さんになつて負けない。
…「ひ、ちょっと怖いけど。

にしても万春さんの隣にいる千冬さんとかすゞいお似合いなのよね。というかやつぱり乳？ 乳のかしら！？ 千冬さんといい、山田先生といい、やつぱり大人の魅力は乳で決まるつてーの！？

ちょっとあんた。あんたまで胸でつかくなりやがつたら、それをもいで私の糧にしてやるからね！

中国代表　鳳鈴音（後書き）

十歳年下に泣きつゝ男。
なんかすじいな。

年を経てもひつぱい鈴。これでいい、六もそれがいいと思つ。

デュノア社社長 シャルロット・デュノア

遠いところからわざわざありがとう。久しぶりだね、皆は元気にしてた？

そつかあ、皆相変わらずなんだね。ふふ、なんだか嬉しいなあ。自分だけ変わらないでいたら、それはそれで置いてけぼりされちゃつたみたいなものだしね。

それで、何を聞きたいのかな？ 応えられるものなら答えるけれど。

……なるほどね、万春先生の事か。

うーん、そうだなあ。ちょっと難しいかなあ。……ああ、ごめんね。折角来てもらつてあれなんだけど僕にあんまり喋られる事なんてないと思うよ。君が聞きたいようなものがないかもしれないし。それでも良いの？

うん、じゃあわかった。僕が知ってる万春さんの事だけでも良いなら話すよ。

でもさ、君も知ってる思つれど。……僕、万春さんの事苦手だ

つたんだよね。だからあんまり仲が良かつたわけでもないし、一緒にいた事も少なかつたんだ。

ああ、嫌いだつたわけでもないし、直接何かされた事だつてなかつた。それに先生としては尊敬もしてたから安心して。だけど、ちょっと先生らしくない人だつたかな。いつもだるそうに煙草吸つてたし、『今日は何食つたつけか?』つてお腹空かせてたしね。懐かしいなあ。

ただ単に僕が勝手にあの人に苦手意識持つてただけの話しだよ。

……なんでかつて？ あはは、いきなり踏み込んでくるね。

そうだね、なんでだろう。ずっとそれがどうしてなのか僕にもわからなかつたんだ。でも IIS 学園で万春先生と会つてからしばらく経つて、それで卒業してから会社を乗つ取つて、ようやくわかつた気がしたんだ。

僕はね、あの人気が苦手なんぢゃない。あの人気が怖かつたんだ。

僕も皆と同じように、万春さんの事は知つてたよ。IIS に関わる前からね。『世界唯一の男性 IIS 操縦者』で、第一回モンド・グロッソ格闘部門の初代優勝者。近接ブレード『絶景』のみで戦い、全てを切り裂いた飛ばない戦士ラストサムライ。すごいよね。

……とても僕にはそんな真似できないよ。

でも、モンド・グロッソや引退前の公式戦を見て、ちょっと違和感で言うのかな、引っ掛かりみたいなものを感じてたんだ。それが何なのかまではわからなかつたけれど、見れば見るほど『フライジール』を操るラストサムライの姿が目に焼きついて、それが嫌だつた。

理由もわからずにな。

君も知ってるよね、万春さんの強さ。世界でたつた一人しかいないISを使える男の人だけ、戦つるのは対戦相手だけじゃなくて世界だつた。

女人しか使えないISを男の人が操縦できるんだから、きっと女人の人からも男の人からも厳しい目で見られてたと思うよ。……それに、ISつていう兵器に乗つて戦うんだから、どんなに怖いんだろう。誰かが助けてくれるかも怪しい世界で、あの人はたつた一人ぼっちだつたんだ。

そうだね、僕はそつやつて万春先生に自分の気持ちを押し付けて、自己投影してた。

特に母さんが亡くなつて、父に引き取られてからそれが強くなつていつたよ。当時のデュノア社で僕はたつた一人で、誰も助けて

くれない。父は僕を政治の道具にしか見ていなかつたし、相手の母は僕を目の敵にしてた。仕方ないかもしないよね。自分の好きな人を取られていた形で、しかもそれに全く気づかなかつたんだから。

……それから僕はずつとあの人を追いかけてた。表には出られなかつたけど、公式戦の記録データを貰つて見続けてた。この人は僕と同じように独りぼっちなんだつて思いながら。

でもね、あの人は全然そんなの関係なかつた。

世界とか、兵器とか女尊男卑とか関係なくて、目の前にあるものはなんだろうが切り捨てていつた。それがどれだけ凄い事かすらどうでもいいようにね、障害や壁を切り開いていつたんだ。

……僕はね、嫌な奴なんだ。そんな万春先生を見て、嫉妬さえしてたんだから。なんでこの人は僕と同じように一人ぼっちなのに、こんなに強いんだろうって。何も出来ずに流されるしかない僕には眩しくて、……苦手になつた。

だからさ、一夏が現われてI.S学園に男として転入するつてわかつてから、チャンスだつて思つたよ。直接この目で確かめてやるつてさ。父の言い分に従うしかなかつた僕だけど、それだけは譲れなかつた。そもそも一夏のデータを盗む呈で行く事になつてたけど、優先事項は違つた。僕にとつて一夏よりもラストサムライのほうが重要だつたんだ。

でも、直接万春先生を見てから、そんな気持ちもなくなつたよ。

あの人さ、初めて会つたときに僕を見てたんだ。ラウラに抱きつかれてぶらさげながらもさ、『余計な事すれば首もつてくぞ』って言つてるのが目を見てわかつた。なかなかないんじやないかな。初めて会つた人に殺氣をぶつけられるなんて。

その証拠に待機状態で刀の形状をしていた『灰鶴』をいつでも抜けるようにしていたからね。見せ付けるみたいに。

……万春先生は全部わかつてたんだ。僕が女で、一夏のデータを盗もうとしているつてさ。まあ当然かもしれないよね。IS学園がそんな簡単に行くはずもない。しかも相手は織斑兄妹。ブリュンヒルデとラストサムライ。特に『世界唯一の男性IS操縦者』だつた万春先生は情報スパイの相手なんて飽きたほどやつてたみたい。僕みたいな小娘がどうにかできるものでもなかつた。

あの人は僕が思つてたような人と全然違つてた。僕は勝手な思い込みであの人に自分と同じ一人ぼっちな人と見当つけて、それに縋つてたけど、でもそんな事はなかつた。万春先生には織斑先生がいて一夏がいて、それにラウラや鈴やもつとたくさんの人人がいた。一人ぼっちでもなんでもないよ。……それですごく怖くなつたんだ。結局僕は一人ぼっちで力を持たない奴でしかないんだつてね。

それから僕は一夏にばれたんだよ、女だつて。

……まあね、気が抜けてたというか、一夏を舐めてた結果だね。

それにね、その時には僕はもうなんだか全部がどうでも良いやつて思つてたんだ。変な話じやないでしょ。望みは違つた。僕の勘違いで。それだけで僕はもう駄目になっちゃつたんだよ。だから一夏が誰かに話しても抵抗するつもりもなかつたし、フランスに戻されても逮捕されても仕方がないなつて思つてた。

でも、一夏は言つてくれたんだ。『俺が助ける』つてね。

嬉しかつたなー。始めてだつたんだよ、そんな事言われるの。

あ、一夏の話になつてたね。『ごめんごめん、話戻すよ。

でも、一夏だつて関係してるんだよ、この話。

一夏はさ、ずっと家族の助けになりたいつて思つてたんだ。ブリュンヒルデとラストサムライが兄妹つてすごいけど一夏は一夏で色々考えててさ、話は聞いてたんだけど万春先生の左目に走つた傷跡

つて誘拐された一夏を助けるためについたものなんだ。それを一夏すごい気にしててね。それを理由に一人とも現役引退しちゃつたら、余計にそう思つてたんだと思うけど、『一人が弟として家族として、一人の男として誇れるようになりたいんだ』って言つてた。

……敵わないなあ、つて思つたよ。一夏は僕と違つて流されずに、強くなろうとしてた。万春先生や織斑先生と同じだね。皆自分のために、誰かのために強くなつてた。

だからさ、僕も頑張らうつて決めたんだ。今まで一度もそんな事考えずに、流されていつか楽になれるつてじつと耐えてきたけど、……抵抗するだなんて想像もつかなかつたけれど、それでも許されるなら自分の未来は自分で切り開きたい。

その結果が今だよね。もひこの会社は僕のもの。

……ふふ、笑つちゃうでしょ。僕だってあの頃には夢にも思わなかつた。

我儘に生きて、自分の思う自分になるためには強くならなくちゃいけないんだ。勿論それは純粋な強さじやないよ。誰にも負けない、意志と心の強さ。それを僕はE.S学園で学んだ。それがなくちや、僕はあのときつと潰れてただろうね。

まあ、これも万春先生の受け売りだけビ。『単純な強さは純粹な強さほど輝かない』って。

でも、それを強く思ったのはツーマンセルトーナメントの時かな。

あの時僕は一夏と組んでラウラや篠と戦つてたんだ。でもね、ラウラは僕やパートナーだった篠にも興味なくて、一夏だけを狙いつけてた。

なんだろうね。因縁つて言えばいいのかな。ラウラはずつと一夏や織斑先生を目の敵にしてたんだ。理由はラウラが万春先生の弟子で、ラウラは万春先生が引退する切っ掛けになつた一夏や、それに妹である千冬さんを恨んでたからだよ。ううん、あれは憎んでたつて言つてもいいよ。だつてあの織斑先生に真っ向から反抗してたんだから。それぐらいすこかつたんだ。しかも転入初日に一夏をビンタして床に叩き落したんだよ。

……信じられないでしょ。君が知ってるラウラから見れば、そんな事するはずがないよね。いつも鈴と一緒にラウラつたら万春先生につかまつておんぶにだつこされてたんだから。あの二人可愛かつたなー。『あんた降りなさいよ！』『貴様が降りるがいい！』つてずっと引っ付きながら言い合つてたつけ。

だけど、それだけじゃなかつたよ。僕はその時いなかつたけれど、

ラウラ万春先生が顧問をしていた剣術部に乗り込んで、部員全員を滅多打ちにしたらしいんだ。

ラウラは軍人で、しかも万春先生の弟子だったからね。皆も善戦はしたらしいけれど負けちゃったんだ。んでね、それに一夏が怒つてね。組み手するはずだったんだけど、織斑先生に止められた。

『好きにやらせるのが良いんだぞ』って万春先生は言ってたけれどね、結局因縁はツーマンセルトーナメントに持ち越した。

|正直ラウラの気持ちがわからなくもなかつたんだ。

あの子はね、あの時万春先生しかいなかつたんだ。仲良くなつてから聞いたんだけど、ドイツ軍で駄目になつていた自分を救つてくれたのが万春先生だつたんだつて。誰からも見放されて、誰も助けてくれない自分の前に現われて強くしてくれたのが万春先生たつた一人だから、ラウラは万春先生以外いらなくて、万春先生たつた人を求めてたんだ。

……まるで僕みたいでしょ？ 理由はどうであれ、僕たちは違う形で万春先生を求めてた。だからね、どうしても他人事のようには思えなかつたんだ。この子も僕と同じような人だつたんだつてね。でも僕はその時頑張るうつて決めたからさ、ラウラにだつて負けやしないつて覚悟を決めたんだ。一夏だつてそつだつた。

……ここから先の話は守秘義務に引っ掛かると思つけど、大丈夫？

そつか。じゃあ、誰にも言わないつて約束だからね。もし喋つたら、怖いよ？

異変が起きたのは、篠を倒してラウラを倒しかけた時だつた。ラウラの『シュバルツェア・レーゲン』がね、変化していつたんだ。

そしたらさ、僕たちの前に黒い『灰鶴』が現われたんだよ。

そうだね。あれはVTシステムによるものだつた。違法なはずだつたんだけど、何故かそれがラウラの機体に組み込まれていたんだ。何故か、なんてわからない。ただ現実として僕たちの前に『灰鶴』が現われたんだよ。

『灰鶴』はね、当時のISで最も壊れやすいISとして知られていて『フラジール』って呼ばれてたんだけど、あの威圧感はそんなもの感じさせなかつたよ。『絶景』を腰に構えていつでも切りかかる体勢のまま佇んでいる姿も、万春先生の姿そのままだつた。でもあれは『灰鶴』じやなかつたのは一目瞭然だつた。だつて、『灰鶴』がPICで浮遊してたんだもの。

欧洲で『灰鶴』が『フラジール』って呼ばれるのはね、ISで
ありながらISではない戦法をやるから、それの侮蔑が込められて
るんだ。空も飛ばないで、いつだって壊せるはずの機体だから『フ
ラジール』。

だからだろうね。一夏はものすごく怒った。そりやそう
かもね。だつて憧れだつた自分のお兄さんの姿を真似られて、しか
もそれが偽者なんだから。あの時の一夏はすごかつたよ。たぶんあ
れほど一夏が怒ったのは、あれぐらいじゃないかな。

それで一夏は『灰鶴』に挑んでいった。でも、やつぱり偽者だろ
うとも『灰鶴』は『灰鶴』だから、一夏は全然相手にならなかつた。
速過ぎて斬られた後に斬られたつてわかるしかないほど、圧倒的な
剣の冴えで『灰鶴』は一夏を切り捨てていつた。

だけど、一夏は全然諦めなかつた。敵うはずもない相手だつてわ
かつてたのに。

でもね、一夏さ『こんなもんで行く道引いてられつか！…』て叫
びながら斬りかかつていつたんだ。

かつこいいよね。あんな真つ直ぐな人、他にはいないよ。

……一夏にとつて万春先生つてどういう人なんだろうね。今でも

わからないんだ。憎んでもないし、嫌いでもないし、それどころか大好きだって言つてたしね。でも、追いついて乗り越えたい相手だったのかなあ。

ほら、男の子って絶対負けられない、負けたくない相手がいるんだ。それが一夏にとつてはお兄さんの万春先生だつたんだろうね。それがどういう気持ちからくるものかわからないけど、僕はそういうよ。

結局その後、ラウラが負けて『灰鶴』の姿も消えた。— 太刀だけ掠つた零落白夜が『灰鶴』を消し飛ばしたんだね。『灰鶴』のそんなところまであれはトレイースしてた。

……実は僕さ、試合の後で万春先生の事見かけたんだ。結局後の試合が全部無くなつちゃつたから、他の生徒とかの事で忙しかつたはずなんだけど、織斑先生が気を失っていた一夏を見ている間、万春先生はずつと外にいたんだ。

それが気になつて僕ずつと見てたんだけど、万春先生煙草吸いながら遠くを見てたよ。ずっと、ずっと遠い所、見えないとこを見るように。なんだか話しかけちゃいけない雰囲気だつたからそのままで一夏の所に向かつたけど、あの時万春先生は何を考えたんだろう。

僕が話せるのはこれくらいかな。『ごめんね、あまり目新

しい話じゃなかつたでしょ。

……そう、そう言つてくれるとこいつちも助かるよ。

じゃあ、そろそろ僕は行くよ。まだまだ会社が奮つてないからね、あと少しで上手くいきそうだからもう一頑張りしないと。

辛くないのか、て？

確かにちょっと疲れる事は多いけれど、今は楽しいからね。それにフランスだと僕ちょっとした有名人なんだ。悪い父や母に虐げられた娘が復讐に正義を示すって。はは、ちょっとした英雄譚みたいことになってるんだよ。だから応援してくれる人もいるし、全然辛くない。

君は、今度はどこに向かうのかな？

デュノア社社長 シャルロット・デュノア（後書き）

シャルのイメージは少し計算高い女の子って感じ。

ドイツ軍I-S配備特殊部隊隊長 ラウラ・ポートヴィッヒ大佐

……珍しい顔だな。我がドイツ軍に向のよつだ。

師匠の「」とこついて、か？ ふむ、確かに教える事はやぶさかではない。お前と私の仲だしな。

だが、メリットが見当たらんな。……意地悪ではない、等価交換といつやつだ。お前は持っているのか、情報を聞き出すに値するものを。

……なつ、それは本当か！？ 嘘だと承知しないぞ！－

本当に、そうなのか……？

はは、……そつか、あのお方は、まだ剣を握つておられるのか。

いいだろう。その情報、確かに受け取つた。ならば教えてやるべ、ラストサムライと呼ばれた我が師匠の事を。

では何から話すか。……私と師匠の出会いいか？

なるほど、順どおりにいけば確かにわかりやすい、か。では、師匠がドイツ軍にいた話でもしよう。お前も聞いた事ないだろう。

そもそも師匠は日本人であり、私が所属する部隊はドイツ軍。
：本来ならば縁もゆかりもない、それこそ私たちに関係性など存在しないはずだった。

しかし、師匠がドイツに借りを作った事で私たちは一筋の線で紡がれる。

師匠の兄妹であるお姉様も来るはずだったのだが、それを師匠は肩代わりする形でドイツ軍に訪れ、我が軍を教導することになったのだ。

そうして私は師匠に巡り合った。

だが、師匠は軍人ではない。私が軍人でしかないのと同じように、あの人は剣士以外の何者でもなかつた。

だからこそ軍行動に必要な教導を行わなかつた。師匠が教導されたのは個人レベルの底上げだつた。一個人としての戦闘力の増強で、軍隊戦闘ではなくあくまで戦闘という点にのみ拘り、指導を下さつた。実際指令部からは再三の教導変更を申し付けられてたらしが、

聞く耳持たずだったな。『関係ないさね』としきりに語っていたな、あの頃は。

当然部隊からも不満が噴出していた。

師匠がラストサムライであり、モンド・グロッソ初代格闘部門優勝者であろうとも、軍人としての矜持と男であるという理由で悔っていたのだ。……私は違うがな。

だが、流石師匠だった。あのお方は我々を完膚なきまでに叩きのめし、己の実力を示したのだ。それが集団戦闘だらうが、I.S.であらうが関係なく師匠は無傷のまま完全勝利でもって我々を従えた。しかも勝利してすぐ『楽しいけど、まだ足りねえな』と煙草を吸い始めたんだ。

弱い者が強き者に従うのは全くの道理だ。戦場ではそれがわからんものほど死にやすい。冷静な状況把握と情報整理が出来ぬのだからな。

そのようにして師匠の教導が行われたが……地獄だったぞ。

やつていた事と言えばI.S学園で師匠がお教えになつていた授業や剣術部と同じようなものだったが、こぢりの場合は軍だからな、遠慮も手加減もされなかつた。

……ああ、そうだ。IS学園での指導に関しては、師匠はある程度の手加減を行っていたぞ。何せ氣絶者などいなかつただろう？

まあ、えぐさで言えば剣術部のほうが上だったかも知れないがな。失神するかしないか、ぎりぎりを見極めて指導されたのだから。

我々はそれに合わせてサバイバル訓練、そして実戦戦闘を行つていた。特にサバイバル訓練ではドイツの山奥で行われるのだが、五日間以上をかけてノルマを達成しなければならず、更にそこへ師匠の襲撃が行われるのだぞ。

『油断そのものがお前達を殺すんだよな』と笑顔で仰られていたが、私たちとしては戦々恐々だ。師匠の奇襲によつて何人の隊員が脱落していった事か……。

クラリッサなど師匠の「指導」が行われるたびに膝を震わせながら内股でうつとりしていたぞ。妙に顔を赤くして『ショーツの換えは足りるのでしょうか』と言つていたが、あれは一体なんなのだ？

知らないくていい？ ふむ、お前が言つならそうなんだろうが、しかし部下の体調不慮を指摘するのも私の務めだと思うのだが。師匠も苦笑していたしな。

まあいい。……兎も角私が言いたい事は、IS学園に在籍していた甘ちゃんの奴らと我々は質が違うと言つ事だ。

我々は軍人であり、そして師匠に鍛えられた戦士だ。ISはスポーツと銘打たれているが、その実兵器以外のなにものでもない。お前が一番それをわかつていてるだろ。ならば軍に属して戦う我々こそ最も強かである。

……何よりも、あいつらは師匠のご指導に対し『酷い』だの『少しほ遠慮して下さい』だの『女の子を泣かすなんて最低』などと戯言をほざいていた。……到底許容できるものではないつ。

貴様にもわかるだろ。いや、貴様だからわかるはずだ！ IS学園に入った私の失望と怒りを。何も考えていない愚かな雑魚共がISを身に纏うというのだからな。

師匠は『どうでもええじゃないか。雑魚には雑魚の戦い方がある』と仰られていたが、私は違う。今でもあの事を思うと腸が煮えくり返つてたまらない。あいつらによつて師匠が汚されたと思うと、縊り殺してしまいたくなる。思わずあの時も笑つたり泣いたり出来なくしてやる所だった。雑魚は雑魚らしく無意味に口を閉ざしていればいいのだ。

そうだ。師匠の栄光を汚したものは何者でも許されるはずない。

断じてだ。

何故だ、と？

そうか。お前は知らなかつたな。

それはな、当時私にとつて師匠だけがたつた一人の味方だつたらだ。

……この左眼はな、擬似ハイパーセンサー仕様のIIS用補佐ナノマシンだ。本来ならば何らリスクもなく施術できるはずのものだが、これによつて私は大きく訓練を遅れる結果となり、一時は出来損ないと呼ばれていた。

想像できない、か。しかし、昔はそつだつたのだ。

当時私にとつてそれは屈辱だつた。

軍人として生まれ育つたのに、実力が伴わなかつたのだからな。だが、それ以上に絶望を感じていた。部隊からは孤立し、実力もない私にとつて存在する理由は皆無だつたのだ。

……だがな、そんな私を救ってくれたのがおの方だ。

『昔の俺みたいだの、お前』と言ひながら、師匠は特別目をかけられてくださり、遅れた訓練を取り戻すためにご指導を毎日していた。だいた。

苦しかつたが、その分だけ私は強くなり、隊員との実力を埋めることが出来、やがて部隊一の実力を得る事が出来た。師匠には感謝しても仕切れない。『俺はなんもしてねえよ。ラウラが勝手に強くなったんさ』と仰っていたがそれは違う。あの方がいなければ私はあのまま腐敗していき、おそらく軍からいられなくなっていたはずだ。だから私は師匠に感謝している。それは今も変わらずにだ。

指導の内容か？ 特段珍しい事はしていない。ただ師匠の襲撃応戦を繰り返していただけだ。一年以上な。

師匠の襲撃は時や場所を選ばなかつたな。食事、睡眠、訓練時やI.S装着時。いたる場所と時間に師匠は私を襲い、戦わなければならなかつた。無論、私が師匠に敵うはずもなく、私はいつも気絶させられていたな。しかも師匠は待機状態の『灰鶴』を使用していたからな、何度斬りつけられた事か。

だが、師匠のおかげで私は救われたのだ。だからこそ師匠を侮る奴らなど許せはしない。

……そういえば、あのの方を師匠と呼ぶようになったのも、その頃からだつたな。

最初クラリッサから言われて『パパ』と呼ばうとしていたのだが、『それは良いけど駄目だ』と師匠から言われたな。ふむ、……何故だろうな。クラリッサは『恥ずかしがっているのですよ』と言つていたがな。……本当にそつだつたら、嬉しいな。

だからこそ、EIS学園での日々は苦痛だった。兵器を兵器と思わぬ弱者共が群れた巣窟なのだ。私も始めは何故あるような場所に師匠がおられるのか、理解できなかつた。

まあ、その中にもマシなやつはいたがな。剣術部を筆頭にした極僅かな人間だけがEISを駆るに相応しい奴らだつた。

ああ、一夏や鈴、それにセシリ亞や簫、シャルがそつだつた。他にも剣術部に在籍していた生徒や、師匠の授業を選択した人間だけがマシな存在だつた。一度実力を見てやるうと乗り込んでいつたが、なかなか手ごわかつたな。……まあ師匠の一一番弟子である私には敵わなかつたがなつ！

しかし、私はお姉さまには敗北をしてしまつた。負けることなど許されないといつのこと。

現役を引退したとは言え、お姉さまはブリュンヒルデ。さらに師匠の妹であられるのだから、当然の事と言えるかも知れない。

だがな、私はあの二人。織斑千冬と織斑一夏を認めるわけにはいかなかつたのだ。

師匠の左目に入った傷跡は一人が原因でつけられたようなもの。その結果師匠はモンド・グロッソを棄権するはめになり、あまつさえ現役を引退するに至つたのだぞ。弟子として師匠の栄光を汚した敵は討たなければならん。……その時は本気でそう信じていた。

それに、師匠はある二人と鈴にだけは私の知る強いままの師匠であつてくれない。私は家族と言うものを理解できないし、師匠の弱さを見たくなかった。私を救い、導いて下さった師匠は誰よりも強く雄々しい剣士であり、弱さなどあるはずがない。

だからな、師匠の弱さなど私が切り捨ててやるひつとしたのだ。

言わないでくれ、その時の自分はあまりに無知だった。
だからこそ知らない事は怖く、必要とさえ感じていなかつたよ。

でも、私は教えられたのだ。

『春兄が意地を張らなくともいいぐうに強くなつてやる』と一
夏に説かれ。

『私は兄さんの全てを知つてゐからこそ、あの人の弱さが愛おし
い。貴様もわかれ』とお姉さまに叱られ。

『万春さんの傍に立たなければいけないの。だからあんたなんか
に負ける理由がないわ』と鈴に頭を叩かれた。

皆強くなろうとしていた。

そう、皆最初は弱かつたのだ。自らの弱さに出会い、そして弱い
ままだと嫌だから、強くなろうとしていた。気がつかれたよ、私も
同じだつたのだと。

ただ私は私の知る、私だけの師匠であつて欲しかつた。師匠じや
なければ、私を認めてさえくれないと師匠を求めていた。……ただ、
それだけなんだ。

な、なんだその小動物を見るような目は。私をそんな目
で見るんじゃない。

私はシユバルツェ・ハーゼ隊長ラウラ・ボーデヴィッヒ大佐だぞつ。

かつての思考はすでに淘汰されている。今の私が昔の私であるはずがないのだ！

……だが、あれからだつたな。私も随分と甘くなつたのは。

お姉さまをお姉さまと呼ぶよつになり、師匠と揃つて買い物にもいつたな。臨海学校に必要なものを買いに行つたのだが、一夏と合流する結果となりお姉さまの水着を見て回り、黒色の水着を選んだな。『お前にや黒がよく似合つさね』と師匠も仰っていたからだろう、お姉さまも嬉しそうに顔をにやけさせていたぞ。

私も私で水着が必要とわかりクラリッサと連絡を取り合つていたが、途中師匠が加わり色々と話したな。ただ、クラリッサは『教官の声だけでじゅくじゅくになつてしまつ』と鼻息荒く言つてたが、一体何がじゅくじゅくになつたのだろうな。

ああ、そうだな。初めて楽しさをこつものを見つめたのがあの頃だつた。

そういう意味では毎日が新鮮に溢れていた。新しい知識、見知らぬ発見があれほど胸躍るものだとさえ、それまでの私は知らなかつたの

だ。だから師匠やお姉さま、それに一夏やつこでに鈴たちに感謝しているや。

だが、鈴に関してはわたしが師匠におんぶをしていただいているのに、師匠の背中にだっこしてもらっていたのは気に喰わないがな、全く。

そうだ、あいつはいつも私の邪魔をする。私はただ師匠と一緒にいたいだけなのに、『そのポジションは私のものよー!』と叫つていつも割り込んでくる。なんなんだあいつはー!

そんなあいつらがいまだは国家代表だ。確かに実力があつた事は認める、師匠のお教えを受けた中では随一の力を手に入れていたからな。ふん、我が隊は今度の Mond - Groiss では警備を任せているからな。私怨で任務を怠る事はないが、もしかしたらなにかしらの要因で警護が出来なくなるかもしねいぞ。

昔のひとじやない、だと? 何を言ひ、現在進行形の話だ!

あの意地悪めが。私が師匠に可愛がられるのはよっぽど気に喰わんと見える。だからいつまで経つても『ちつぱい』なのだ。私は違うぞ。見るがいい、この伸び上がった背丈を! 今ではお姉さまにも引けを取らないのだ。

……しかし、そうか。安否が知れたならば問題はない。

あのお方はいつだつて障害を己が剣で切り開いてきたお方だ。如何な者が相手であり、幾ら卑怯な手段や策を用いようとも、きっと斬り捨てるだろ？私の知つている師匠はそういうお方だ。

うん？……なんだ、このヌーの大群が大移動するような音は。

ああ、不味いな。クラリッサがどこからか嗅ぎ付けたか。あいつは師匠のことに関しては私以上に敏感だからな。きっとどこからか話を拾つてきたのだろう。

仕方ない、取り合えず私が抑えとく。その間にお前はもつ行くといいだろ？

では、さらばだ。

……お前と会えてよかったですよ。

ドイツ軍I-S配備特殊部隊隊長 ラウラ・ポーテヴィッヒ大佐（後書き）

クラリッサがなぜか色物に。どうしてこうなった。

やばー、寝てた。

『ラストサムライ』とはよく言つたものだ。あの人の駆る『灰鶴』は『銀の福音』の猛攻を切り裂き容易く避けていった。まるで『灰鶴』そのものが一振りの刀剣のようだった。

しかし、本来であるならば万春さんが『銀の福音』を相手にしなくても良かったのだ。……全ては私の責任だった。

私は、浮かれていた。あの時はそうとしか言いよつがない。私の未熟さが浮き彫りになり、そして自分本位な行動を行っていたのだから作戦が成功するはずもないんだ。

……何故かつて？ つふ、それはな、私はあの時自分の力を見せ付けるために動いていたからだよ。

確かに『銀の福音』は危険な相手であり、それが暴走状態に陥っているのだから並大抵の相手ではない事は百も承知。……だが、このように並大抵な相手と自然に考えただけで、私は倒せると思つていたんだ。情けない話だが、本當だ。姉さんから『紅椿』を貰つた直後だつたから、と言う事だけが理由ではない。一夏と私なら上手くやれると根拠のない自信に満ちていたのがそうだ。

私はな、昔からそういう奴なんだ。単純で、頭が回らない。……恥ずかしい限りだ。よくそのことで万春さんには面倒をかけていた。

あの人は私の父が教えていた篠ノ之道場の門下生であり、私からすれば兄弟子にあたる人だ。万春さんは父の愛弟子みたいな方でなく、よく可愛がられていたよ。一夏の両親が失踪した後、万春さんに仕事を回したのは私の父だ。それほど父は万春さんを気に入っていた。だから娘である私とも面識があり、道場ではよく打ち合いをしていたが。……いや、あれは打ち合いなんてもんじゃなかつたな。

万春さんの剣の腕は知っているだろう？　あのお方の剣は天衣無縫の剣だ。何者にも縛られず、目の前にある敵がなんであろうが斬り裂いてしまう。あの頃から他の門下生とは一線を画した強さを持つていて、自分より年上の相手であれども容易く勝利を収めていた。

幼かつた私はそれに憧れて、よく試合を挑んでいたが遊ばれてお終いだつたな。の人からしてみればただのじやれ合いにしかならず、『おつと今のはよかつたぞ』と私の打ち込みは雲を切るように見切れ流されていた。まあ、たまに竹刀で受け止めてくれる事もあつたが、そこまでだ。ことごとく相手にならなかつたよ。

大人と子供という差もあるだろう。何せ万春さんは私より十歳も上で、その時には体つきも出来ていた。対して私はまだまだ子供で、女だつたから同じ年の男どもと比べれば発育も良いほうだったが、それでも雲泥の差だ。いいようにあしらわれていたよ。

しかも私はそれを気にして相手にぶつけにいくよくなざまだ。よ

くそれをくすぐられてあっけなく負けていた。『お前はもつと相手を見なけりや駄目だな』と教えられていたが、それを私は結局理解できていなかつたんだ。そしてずっと理解せぬままにしていた。

だからな、万春さんでは相手にさえしてくれなかつたから、一夏とよく打ち合つていた。一夏もなかなかその頃は強くてな、私と噛み合つようだつたよ。

だが、そんな日々が急に変わつていつた。

姉さんがＩＳを作り上げてから、私たちの周りは大きく動いていつた。

姉さんは、……なんだろうな、よくわからない人だつた。頭が滅法良くて私には理解できないものを理解して、私には見えないものを見ていた。所謂天才と呼ばれる人間だつた。

だがな、あの人は何か人として致命的なものがごつそりと欠けていた。世に生まれた天才とは大抵異常者とされていたが、姉さんはそういう意味では正に真性の異常者だつた。私は子供ながらに不気味でしようがなかつたよ。

今では、……どうなんだろうな。はは、今でも私は姉さんを理解出来ないんだ。

ただ姉さんは万春さんや千冬さんは仲が良かつたな。私や一夏もまあ気に入つていたらしいが、一人の場合はそれ以上だつた気がするよ。

そんな姉さんが作り上げたISによつて世界は変わり、そして私たちもそれに飲み込まれそうになつた。姉さんが行方不明になつた後、ある時政府の人間が来て、私たちを守るためと言いながらバラバラに暮らす事を強いてきた。……あれはそう言つていたが、その実私たちを人質に取り姉さんの居所を掘もうとしていたんだろう。その時にはわからなかつたが、ただ怖かつた。

だけどな、そんな私たちを助けてくれたのが万春さんだ。『俺は恩は返す人間だしな』と言いながら政府の人間を返り討ちにした。

すごかつたぞ、私は人が空を飛ぶ瞬間を始めてみたな。

そして政府が力ずくに出ると、万春さんは容赦をやめた。拳銃の弾丸を切り裂き、滅多打ちにした。たぶんあの時が初めてかもしれないな、人の暴力がどのようなものか理解したのは。権力と暴力によって私たちへと襲い掛かる政府の人間と、それを純粹な暴力によつて斬り捨てる万春さん。それらがぶつかり合つて、片方が倒れていく。

……そうしている内に万春さんがＩＳを纏つた。政府の人間は唖然としていたな。何せ、ＩＳは女性しか使用する事ができないと正式な発表が行われた後だからな。たぶん万春さんはそれを知つててわざと見せ付けるようにＩＳを使用したのだ。……私たちを守るために。

普通抵抗を行えばただではすまない。国家とは、世界とはそういうものだ。

だが、万春さんはそれと真っ向から戦い、斬り捨て出し抜いていつた。男でＩＳを操縦できるという価値を利用して条件を飲ませ、私たちは一家離散の危機を脱した。しかし、そのせいで万春さんは更なる戦いの中に入り込まなければならなかつた。

ああ、そんな心配必要ないんだ。万春さんは戦いを求めていたのだからな。

ただ己の剣のみでどこまでいけるかを求め、そしてそれはＩＳを相手であろうとも関係なかつた。ひたすらに真剣勝負を望み、そこでの勝ち負けに拘り続けていたのだから。

だけどな、そんな事当時の私は知らなかつた。親しい人がよくわからぬ流れに巻き込まれていつたと、なんとなくそれだけは理解していた。

だからこそ、私は姉さんを恨んだ。

まるで他人など興味もなく振舞い続け、その結果家族がどうなるかも気にせず、万春さんがどんな事になつても知らぬ顔だ。……正直、なんであんな人が自分の家族などと、その時は本気で思いもした。

兎も角、そんな訳で私たち家族は万春さんには感謝しても仕切れぬ恩を与えられてしまつた。『元から俺が貰つてたもんを返しただけさね』と万春さんは笑いながら言つていたが、決してそれは釣り合つてないだろう。だから、私はあの人を受けた恩を返したかった。

だが、それから万春さんは忙しくなつて全然会う事が出来なくなつてしまつた。『世界唯一の男性IS操縦者』だからな。ほとんど家に帰ることも出来ず、テレビの向こう側の住人となつていつた。

残された一夏や千冬さんは寂しそうだつたよ。特にモンド・グロッソの時にはお二人とも出場するため海外へと向かわなければならなかつたのだから、一夏だけが残される事になり私の家に預けられる事になつたが、……普通じやないだろう。未だ幼い子供が一人残されるなど。

私は何故だろ?と必死に考えたさ。変わらない日々か來ると当た

り前のように信じていたのに、何もかもが目まぐるしく変動していったのは一体どうしてなんだと。そして全ての現況は一体なんだと考えた時、それは一目瞭然だった。

どれもこれも全て姉さんが原因だ。

そう考えるようになつてからはもう止まれなかつた。

私はI.S学園に入らなければならず、一夏がI.Sを動かせるとわざり強制入学を受けなければならなかつたのも、全部姉さんのせいなんだ。恨みは怒りに変わり、そして遂には憎しみにさえ成り果てようとしていた。……そんな自分は嫌だつたよ。あまりに醜く、なんて汚い存在なんだとな。

だから必死に剣道へと打ち込んでいた。剣を奮つている時だけは余計な事は考えずにすると思いながら。

しかし、私の剣はいつのまにか濁つていたんだ。

あれはいつだつたかな。……そうだ、確か一夏がセシリシアとの決闘を行うための実力を測るために、剣道場で打ち合つていた時の事だ。

そこに万春さんが現われて『久々に見てみるかね』と私に稽古を

つけてくれたんだ。…… そういえばそこで初めて私は I.S 学園に万春さんが勤めているのを知ったな。いや、偶に帰ってきている事は知っていたが、千冬さんと異なり殆ど会つ事も出来なかつたからな。

私は万春さんに「」の剣を見せるために全力で挑んだ。

勝負に余力を残す事は重要だが、あの時は正真正銘の全力だつた。

しかし万春さんはあっけなく私を打ち倒し、つまらなそうな顔で『迷いを斬るならまだしも迷いで斬ろうとしてんだから、そりや鈍らになるな』と言われた。

愕然としたよ。万春さんは剣士だ、だからこそ私の剣なんてお見通しだつたんだ。私が自分の鬱憤を晴らすために剣を握っているとな。

そして私は万春さんに失望されたと思つた。当然だろ、昔から面倒を見ていた奴が邪念でもつて剣を奮つていると氣づいたのだから。

でもな『よかつたな。取り返しのつかない事にならなくてさ』と万春さんは私を許し、『これから治していこつか』と稽古をしてくれるようになったよ。あの人は私の剣を見捨てるなどせず、真摯に私を導いてくれたんだ

だから私は万春さんの期待に応えたかった。師匠とも呼べる人の期待に。

だが、結局私は変わらないままだったんだ。

……臨海学校で『銀の福音』を迎撃たなければならなくなつたとき、私は有頂天になつていた。姉さんが作った『紅椿』は第四世代のIS。まず負けるはずではなく、私と一夏ならば打破できると浮かれてしまし、結果敗北した。作戦領域内にいた密漁船を見捨てようとして……私が至らないばかりに一夏が撃墜するという結末を迎えてしまつたのだ。

酷い話だろ？『』の未熟さが一夏を危険にさらしたんだ。

……ああ、本当にそう思つよ。あまりに私は愚かだつた。

私は剣士であつとも、戦士ではなかつた。剣を揮う事は出来ても、戦いのなんたるかを理解せずあの様だ。一方的な勝利などありはせず、いつだって命の両天秤は均一だ。どちらかが傾き、片方が浮き上がる。

だから私はもう一夏にも、万春さんにもあわせる顔なんてなかつ

た。あの人の教えを結局理解できず、結果一夏を命の危機にさらしたのだから。

でもな、鈴に怒られたよ。子供のようにぐずぐず泣いていた私に向かつて『泣いてるなら誰でもできる。だけど泣いてる暇があつたら戦いなさい。前を向かない奴に勝利なんてないんだからね』と。鈴は私とは大違いだ。万春さんを真っ直ぐに追いかけて戦いの中へと飛び込んだあいつは強くて、……羨ましかった。そうだ、私は鈴が羨ましかったんだ。誰よりも強い万春さんの傍にいくため、好きな人の助けになりたいためになりふり構わず向かつていく。あんなに鈴は気高く強い。

私と違つてな。

けれど状況は待つてくれない。私がまごついている合間に万春さんが出撃してしまったんだ。皆の制止を氣にも留めずに行つてしまつたらしい。

私たちが『銀の福音』へと向かうとすでに戦いは始まつていた。……嵐が訪れたかと思つたよ。『銀の福音』が繰り出す攻撃に空の色さえ変わろうとしていたんだ。それほどまでに激しい銃撃が行われていた。

その中に万春さんはいた。『灰鶴』は浮遊しないままにな。弾雨の嵐の中、『灰鶴』は空を飛翔し、着地をして蹴り上げていたんだ。

あれは『灰鶴』の単一仕様能力『朧』によるものだ。

『朧』は『灰鶴』にのみ触れる事が許された壁を任意に展開する能力であり、その壁を接着面として使用することによって『灰鶴』はどのような場所であれつとも三次元機動を可能としている。

無論、例え空の上であろうとも足場を作り上げるのだ。

それによつて万春さんの剣は地上にいる時と同じような冴えを見せられる。

そもそもHS装着時と生身で剣を振る場合、ある点に変化がある。剣を揮う際に用いられる要素は肉体と重力、そして地面だ。

それらが複合されることによつて剣は剣としての切れ味と重みを持つことができる。

HSにはそれがない。PHCによつて重力から離れ更に足場されない空中上で剣を振るのは、生身との圧倒的な差が生じるという事だ。

しかし万春さんが駆る『灰鶴』はそれがない。の人にとっては地上であれつが空中であれつが関係なく、『絶景』を揮つことができるのだ。

……正直、圧倒的過ぎて言葉にできない。あの時あの場所にいた私たちは呆然とその戦いを見ていた。……見とれていた。

まるで万春さんのために用意されたような独壇場が私たちの目の前にあつたんだ。『灰鶴』は一発でも当たれば機能停止に追いやられる際物だ。そのような状態で『銀の福音』が撃ちだす弾雨の中で万春さんは縦横無尽に立ち回っていた。しかも絶対防御すら機能させていないのだぞ。まともな神経をしていたら、そのような戦闘に精神が耐えられるはずがない。

だが、そんな中にいるといふのに、万春さんは笑っていたんだ。

それは私たちが攻撃に加わり『銀の福音』が第一形態となつてもそれは変わらなかつた。むしろ更に笑つていた。『これは楽しいじゃないかい。そりじゃなきや斬りがいない』と嬉しそうにな。

あの時、私は怖気を感じた。結局その後なぜか回復しきつた一夏が駆けつけ万春さんと共に『銀の福音』を撃破したが、それでもあの感じは私の中から消えなかつた。だが、『体は十全かい。もうちょっと寝とけりや良かつたのにの』と一夏を心配する万春さんを見てそれも氣のせいだつと私は無視した。

……今でもたまに思つんだ。

もしあの時はつきりとあの笑みの意味を万春さんに聞いていれば、あの人私が私たちの前からいなくなる事もなかつたんじやないのか、とな。

すでに過ぎた事だ。過去は幾ら鑑みても変わることはない。しかし、それでも私は思わずにはいられないんだ。皆で過ごしたあの日々が楽しかつただけに、余計にな。

そして私が何故あの人の笑みに恐れを抱いたか、あの人人が突然いなくなつてからようやく気づいたんだ。

万春さんの笑顔は、どこか姉さんに似ていたんだよ。

……これで私が話せることは全部だ。あとは一夏にでも聞くがいい。

たぶん今頃は剣道場にいるんじゃないかな。今度のモンド・グロッソには気合が入っているからな、あいつ。

ああ、そういうふうして日本代表補佐になつたか話してなかつたな、そう言えば。

い、いや。忘れてたわけじゃないぞ？ そもそもお前が日本にい

ないのが悪いんだ。うん、そうだ、そうに違いない。

……話さなくともいい？ な、なんだその目は。私はまだ一夏が
国の代表として慎み深く恥じない行動をするか見張るだけで、決し
てあいつの傍にいたかつただけだなんて事じゃないんだからな。本
当だからな！！

ショックの丘原さんとコーヒーを一丁五、六杯は飲んでるって話したら身体に悪さがあるって言われた。そいつ、だから最近吐き気がすごいんだ。

日本代表 織斑一夏（前書き）

もう少しでクリスマスが終わるらしい。

お、帰ってきてたのか。おかえり。

ちょっと待つてくれよ。……みしこれで終わるだ。いや、中途半端に身体動かすとなんか気持ち悪いだろ。だからちゃんとこもっておきたかったんだよ。

それで、旅はもう終わったのか？……そつか、もう少しだけ見て回りたいのか。まあいいんじやないか。お前なら大丈夫だろ。

心配じゃないのかつて？ どうしてだ？ お前充分強いじやん。俺でも歯が立たないんだから心配する必要もないだろ。

あ、もしかしたらお前に襲い掛かるやつがいるかもしれないとか。そうだな、確かにそれは心配だな。相手のほうが。お前がやりすぎないかどうかが俺は心配だよ。

ちよちよちよ、その握り拳はなんだおい。久しぶりに会ったのにそれはないだろー。

いてえなあ、畜生。そんな強く殴んじゃねえよー。

つたぐ。……でも、久々だな。いつやつて誰かに殴られるの。

……おこマゾとか言つた。叩かれておいて嬉しそうとか変態、つてひでえ言い草だな。

いいじゃないか。家族のふれあいの一つとでも思つてくれよ。最近は千冬姉も忙しいし、お前もお前でふらふらとあっちこっちに行つてるもんだから、家が淋しくてしょうがねえんだからよ。

それで、何が聞きたいんだ？

なんだ、その顔。びっくりする事ないだろ。俺はな、何となくだけどお前が何を聞いたがつてるかわかるだ。……言つてやろつか、春兄のことだろ？

やつぱりな。お前はそういう顔をしてた。すごいか、エスペーミたいだろ俺。

……そんな冷めた目で見るなよ。結構傷つくぞ、それは。

まあいいや。それで春兄の事だな。そつこや、お前春兄の事あんまり知らないもんな。お前が来た時には、もう春兄はどこかに消え

ちまつてたし……。

けじそうだな、なに話そつか。

ん？ なんで春兄って呼んでるかつて？

ああ、春兄は万春つて名前だけじさ、万春兄つて何か言いづらいだろ？ 語呂が悪いといふか、千冬姉は言いやすいんだけどな。それで千冬姉からの提案で春兄つて呼ぶことにしたんだ。初めて呼んだときは『ほお、なかなか良い仇名じやないかい』ってさ、春兄笑いながら俺の頭撫でてくれたよ。

そん時どんな気持ちだったかはもう覚えてないけど、たぶん嬉しかったんだと思う。春兄はよく俺と一緒にいたしな。やっぱ家族が笑ってくれたら嬉しいに決まつてんだろ。

でも懐かしいなあ。俺と千冬姉と春兄でずっといたんだよな、あの家に。

俺、両親の顔とか覚えてないけど、一人の顔だけは昔からずつと覚えてるんだ。春兄は二ヒルな感じだつたけどいつも剣には真剣でさ、千冬姉は昔から出来る女人の人つて感じだつたよ。まあ千冬姉、昔はあんまり料理できなかつたんだ。今だつて家事殆ど出来ないけれどさ、その時は料理だつて駄目で家事なんて何も出来なかつた

ぞ。だから俺が家事とかやるよつになつたんだ。

春兄？ 春兄は殆ど篠の親父さん所にいて竹刀握つて、家にいてもだるそうに寝転んでばつかだつたから家事なんてやんなかつたよ。俺が幾ら言つても手伝つてくれなくてさあ、ほんと俺だけで家の事は全部やつてたよつなもんだ。

……ん？ もしかしたら春兄、千冬姉より家事出来ないんじゃないのか？

「わ、ありえそつだ。といつか間違いなくそつだろ。米とかとげんのか。

でも、セシリ亞みたいな事はしないと思つから大丈夫だろ。……たぶん、きっと。

まあ、春兄なら料理できなくても生きていけるだろ。千冬姉だって料理できるようになつたし、俺も簡単なものなら作れるしな。春兄はいつだって食べる専門だよ。

……ほんと、今なにしてんのかなあ、春兄。

そりゃ心配だろ。だつて家族のことだしな。家族の事心配しなく

て、何を心配すんだよ。

まあ、心配させるほど春兄が弱かつた事なんてなかつたけど。

春兄はさ、すげえ人なんだ。千冬姉だつてすごい人で尊敬してるけど、春兄は俺たちのために早い頃から働いて金を稼いでたんだ。たぶん春兄が高校生ぐらいの時じゃないか？ 春兄学校には通つてなかつたけど、それでもそんな十六ぐらいで家族のために働く事なんて出来ないとthought。

それに剣の腕もすぐれて、春兄に勝てる人なんて誰もいなかつた。

だからさ俺、大人になつたら春兄みたな人になりたいって思つてた。体張つて俺たち家族のこと守つてくれたんだ。そう考えるのも仕方ないことだろ？

でもさ、春兄が『世界で唯一 I.S を動かせる男』になつてからは大変だつたんだろうな。

その頃はいつもテレビに春兄が出てたな。俺たちそれをじつと見てた。あん時は千冬姉も淋しそうだつた。前もちょくちょく家に帰つて来なかつた時もあつたけれど、全然帰つてくることなくなつて

さ。たまに帰つてきてもなんでもない風にしてたけど、すごい疲れてたのはわかつてた。

俺もなんとかしたかった。だけど大人の世界にいる春兄に出来ることなんてほとんどないだろ。それでも『そつやつて想つてくれるだけ、俺は上手くやつていけるさ』って春兄言つんだ。そしたら俺ますますどうにかしたくつてさ。

確かに仕方のないことかもしれない。だけどさ、それでも大事な家族がとんでもないことになつてるんだから、心配ぐらいするわ。

その内、千冬姉もT.S搭乗者として大人の世界に飛び込んでいつた。『私がいれば、多少は兄さんも楽になる事ができるはずだ』つていながら。

皆やるべきことを見つけて、それに向かつて頑張つてた。じゃあ俺は何が出来るんだらうつて、そん時はすごい考えてたよ。……子供が考える事じゃないよな。

けど、そんな考えも第一回モンドグロッソで春兄と千冬姉が戦つてゐる見て吹つ飛んだ。

二人とも滅茶苦茶強いんだ。誰も二人に勝てなくて、決勝戦で二人が戦う事になつた。誰も相手になんかなつてなかつたよ。本当に

圧勝して、兄妹で決勝戦だ。漫画やアニメみたいだろ。でも、実際にそうなったんだよな。

かつこよかつたよ。あの一人の家族である事が自慢に思えるくらいに。

だけどさ、テレビの向こうで切り結んでる一人を見て思ったんだ。

俺、置いてけぼり食らってんだなって。

二人ともすごい速さで走っちゃって、俺はそれに全然追いついてない。どんどん一人は見えなくなつて、最後には俺一人だけ残されるんだ。

……ひねくれてるとか言つな。ほんきでそう思つたんだから仕方ないだろ。

一人つて淋しいだろ。特に一人とも有名人になつちまつたから、いつも家には俺一人しかいなくてよ。篠の家にはお邪魔してたけど、それでもどこか心がぽっかりとしてんだ。誰もいない家で自分のためだけに飯作るんだぜ。それで一人が傍にいなつて思うほど、それが広がつて深くなつてくれんだ。

だからさ俺、まずはあの一人に追いつく事から始めようと思つたんだ。世界最強の兄と姉の場所まで行こうって決めたんだよ。

もつと俺がしつかりしてれば、そうは考えなかつたかもしない。もし二人のどちらかがいなかつたら仕方のない事だつて納得がいくかもしれない。

だけどよ、春兄を追つ掛けて千冬姉は行つちました。それで俺だけが残つてんだ。……納得いなかないだろ。せめて春兄か千冬姉、どっちかがいてくれれば良かつたのに。

俺、簪の気持ちが分からなくもないんだよ。簪は先輩に嫉妬して、先輩がすごいければすごいほど自分が惨めに思つてた。俺ももしかしたら、そうなつてたかもしれないからな。…………でもさ、俺って負けず嫌いだから一人に追いつきたいつて思つたんだ。

けど俺が誘拐されて、それが原因で一人が現役止めたときは参つたよ。俺のせいだ二人ともIS止めちまつて、しかも春兄は左目が見えなくなつちました。なんて駄目な奴なんだろう、いつそ死んでしまえばよかつたんじやないかつて思わず言つちました。

……そしたら千冬姉にすげえ怒られた。あれだけ怒つた千冬姉は今でも見た事がないな。

『ふざけるなよ。お前が死んでしまったら、残された私たちはどうすればいいんだ！』って泣きながら言われて、春兄には『俺はお前が家族でよかつたって思つてるけれど、お前は違うのかい？』って言われたよ。

情けねえよ。家族心配させて、それで怒らせてさ。結局そん時は自分の事しか頭になくて、一人がどんな気持ちかだつたかなんて俺全然考えてなかつた。でもよ、一人が俺の事すごい大事にしてくれてるつてわかつたから、結構楽になつたよ。

だからさ、俺は一人を守れるぐらいで強くなひつて決めたんだ。

……それが最初の俺の誓ひつてやつかな。

今思えば、たぶんきっとそなうだろつな。

はは、そうだよな。あの一人を守れるぐらいで強くなるつて、土台無理な事かもな。けど、最初から諦めてたらきっと何も出来ないだろ。

それにもう決めちまつたんだ、あの時に。一人を守れて、俺の事を誇りに思えるくらい強くなつてやうつってさ。

そういう意味じゃ、俺もISが動かせる事が出来るってわかってるよかつたよ。千冬姉は心配してて、俺も最初は戸惑つてばつかだつた。でも、ISが動かせられるんだつたらあの時の誓いを果たせるんじやないかって考えたんだ。だから、その時やつと俺はスタートラインに立つたんだよ。

……ん、あれ？ いつの間にか俺の話になつてた？

うお、今掠つた、掠つたぞ！？

お前の話なんか聞きたくない、つて冷たいなあ。

ああ、わかつた、わかつたから！ だからその右手を下ろせ！

……それじゃ春兄の話に戻すぞ。

でも、そうだな、お前は春兄の何が聞きたいんだ？

俺が知ってる春兄のことだけでいい？

ほんとうにそなのか？

……まあ、今はそれでいいのかもな。

さつきも言つてたけど、春兄つてあんま家にいなかつたんだよな。それよか剣ばつか握つてて、いつも戦つてばかりいた。組み手で、稽古で、喧嘩で。なんか餓えた鷺みたいにあつちこつちに行つては戦つてたよ。ISに乗つてもそれは変わらなかつたな。寧ろ『世界で始めてISを動かした男』つてやつを利用して世界中に飛んで戦つてたから酷くなつてたかもしれない。

だけど俺たちの事は大切にしてくれてたんだ。少なくとも俺や千冬姉はそう思つてた。俺たち家族は大丈夫だ。何も問題にならないし、誰もいなくならないつてな。

……あれは確か『銀の福音』を倒した後だつたかな。春兄が砂浜にいて煙草吸つてたんだ。俺も一緒にいた。一人で俺たちは同じ風景を眺めてたんだよ。

そしたらさ、春兄が言つたんだ。『強くなつたな、一夏』てさ。俺は嬉しかつたよ。だつて春兄たちに認められるくらい強くなるつて思つてたからさ。

でも俺が強くなつたのは皆がいたからだ。皆がいたから俺は強くなつたんだ。そう言つたらさ春兄が頭撫でてくれてよ、『じゃあ、お前がいれば皆大丈夫だの』って笑つたんだ。淋しそうな顔でさ。

俺、なんだか嫌な予感がしたんだ。なんかもやもやつて感じが胸の中に入ってきて、それが消えてくれないんだよ。

……今思つと、春兄が言つてた箇の中に春兄は入つてたのかなあ。

たぶんそれが始まりだつたんだ。

夏休みに入つていつも通りが戻つてきたつて思つたけれど、春兄は前よりも剣にのめり込んで何にも興味なかつたな。いつも行つてた筈の家の夏祭りにも行かないで、ずっと剣を振つててさ。筈の親父さんと打ち合いばっかりしてた氣がするよ。柳韻さんは春兄の師匠で、一人だけ春兄とともに組み手が出来る人なんだ。夏祭りとか篠の事とか関係ない感じで打ち込んでるから、俺もあんま話すことが出来なくてさ。話しかけても『ああ、大丈夫だよ。やる事があるから、もっと強くならないといけないしの』ってとともに取り合つてくれなかつたんだ。

……まだ強くなろううつとしてるんだ。あれだけ春兄は強いのに、まだ上を目指してるので言つてたんだよ。一体どこまで行こうとしてるのか、俺にはわからなかつたよ。

でも、あの時ちゃんと理由を聞けばよかつたんだ。

文化祭の時さ。亡国機構のエージェントに襲われた時だよ。先輩が色々と考えてやつてきた奴だったんだけど、……そいつがさ、昔俺を誘拐した奴だったんだ。

もう目の前が真っ赤になつたよ。そいつがいなけりや春兄や千冬姉が現役やめなくて済んだし、春兄も左目が見えなくなるようなこともなかつたんだぞ。しかもその時は白式奪われて、もう頭の中が何も考えられなくなつちまつた。もう俺は何も出来なくて、あの時の仕返しすら出来なくてすげえ悔しかつた。

そしたらさ、そこに春兄が来たんだ。『一夏、戦いに憎しみを持ち込んじやあいけないさね』って言いながら。

でよ、それまで戦つてたエージェントが春兄を見て、すげえ顔で笑つたんだ。『戦う理由は見つかつたか、てめえ』って睨みつけながらだ。

ああ、オータムつて言つんだつけあいつ。

そう。俺たち家族の敵、春兄の左目を奪つた奴。

そして、純粹に春兄と戦える唯一の相手。

……気づけば一人は戦つてた。俺なんか放つておいてさ。相手も俺の事狙つてたはずなのに、春兄に真っ直ぐに向かつて行つたよ。

だから思つたんだ。俺はまだ全然追いついてないんだってな。

実はさ、『銀の福音』を倒してから少しだけ自信がついてたんだ。俺はここまで強くなつた、あと少しで春兄たちのいる場所に届くつて。

でも、俺は勘違いしてた。少しも追いついてないんだ。相変わらず俺は春兄の後を走つてる。背中を追い続けている。

全く、ついてく奴の苦労なんてお構いなしだよ。ほんとに。

あの頃はいろんな人が春兄を見てた。戦うたびに見る奴が増えてたなあ。

他の生徒も、専用機持ちまでもだ。皆春兄の姿を目に焼き付けようとしてた。

俺も 、もう少し見ていたかった。

……俺はまだ走り続ける。春兄の場所にたどり着くために。

だからさ、モンド・グロッソだつて足がかりにしかならない。

なりふり構つてなんかいられないんだ。少しでも気を抜くとあつ
という間に遠くへ行つちまう。

そういう人なんだ、春兄は。

……ま、仕方ねえさ。憧れちまつたんだ。

意地があるんだよ、男の子にはな。

日本代表 織斑一夏（後書き）

スクライド一夏。

吐き気がこないなあ。胃薬最強説

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7546z/>

デスティニーな兄

2011年12月25日22時52分発行